

I 学 校 教 育

1 本 年 度 の あ ゆ み

(1) 第 34 回 和木町「教師の日」

11 月 24 日（金）に和木町文化会館で、小中学生、教職員、保護者や教育関係者など約 400 名の参加を得て式典を行った。本年は、和木町町制施行 50 周年という節目の年であり、東京工業大学副学長の上田紀行氏をお招きし、特別記念講演会を行った。



— 「教師の日」式典 —

教育委員会表彰

- 開式の辞
- 教育長あいさつ（教育長 重岡良典）
- 来賓祝辞（町長 米本正明 様）
- 教育委員会表彰
- ホームステイ研修発表
- 和木町町制施行 50 周年記念特別講演
（講師 東京工業大学副学長 上田紀行 様）

演題「自分の『ステキ』をどどんのばそう！ 自分も輝き、世界も輝かせる生き方へ」

- 閉式の辞

令和 5 年度 和木町教育委員会表彰者一覧

No	所属等	氏 名	推 薦 理 由
1	和木小 2 年	内 田 妃 織	令和 4 年度第 68 回山口県読書感想文コンクール 優良
2	和木小 3 年	前 田 怜 大	第 59 回 全国児童才能開発コンテスト 図画部門 佳作
3	和木小 4 年	大 野 美 怜	令和 4 年度第 66 回山口県読書感想画コンクール 優良
4	和木小 4 年	山 本 紗 瑛	第 47 回ピティナ・ピアノコンペティション 中国 4 地区 B 級 本選奨励賞
5	和木小 5 年	三 宅 陽	第 41 回 J S B A 全日本スノーボード選手権大会 スロープスタイル U-18 男子の部 第 1 位

＜成果と課題＞

教育情勢を含め、目まぐるしく変化する現代社会において、和木町教育の根本原理である「尊師親愛生」(子は師・親を敬い感謝し、師は子を讃え、親は師を敬い、子を慈しむこと)の精神にもとづく教育風土の醸成は、普遍的な価値として、その必要性は高まり、それらを深めることで、教育はその輝きを増す。

今年度は、和木町「教師の日」34回目の開催となった。新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、感染症拡大前の参加人数での開催となった。教育委員会表彰において、受賞者の栄誉をたたえ、温かい雰囲気の中で素晴らしい式典を行うことができた。ホームステイ研修発表会では、参加者がスライドショーを使用し、英語による報告を行った。



また、今年度は、和木町町制施行50周年という節目の年であり、特別記念講演として、東京工業大学副学長の上田紀行氏をお招きし、「自分のステキをどんどんのぼそう！自分も輝き、世界も輝かせる生き方へ」という演題のもと、講演会を行った。外国の人たちが、人をよく褒め、自分のよいところをたくさんアピールするという事例から、優れた人と自分を比較することなく、自分の素敵などころや得意などころを見つけ、それをのぼしていくことの大切さを説いていただいた。子どもも大人も一緒になって考え、自分を見つめ直す、素晴らしい時間となった。

来年度は、和木町の教育を具現化する「教師の日」の取組を継続・深化するとともに、ホームステイの研修報告会を始め姉妹都市交流派遣事業に係る報告会など、より充実したプログラムを検討し、協議を重ねていきたい。

(2) 国際交流事業(和木町中高生海外派遣事業)

ホームステイと英語研修を主に行う「和木町中学生海外派遣事業」は、平成8年よりスタートし、本年で23回目を迎えた。例年中学3年生を対象としていたが、新型コロナ禍により開催できなかった時期もあったため、対象を中学3年生から高校3年生までとし、和木町中高生海外派遣事業として実施、10名の参加者があった。累計すると、平成8年度からこれまでに、377名の生徒を海外に派遣した。

今年度は、ニュージーランドオークランド市の小学校での語学研修を中心として、ホームス

ティを実施した。参加した子どもたちは、学校生活においても、ホストファミリーとの生活においても充実した日々を送ることができた。



令和5年度和木町中高生海外派遣事業参加者

番号	氏名	性別	クラス	番号	氏名	性別	クラス
1	見常 美桜	女	1組	6	村岡 玲那	女	2組
2	福村 太我	男	1組	7	内藤 旭	男	1組
3	池田 桃寧	女	1組	8	中村 心栄	男	2組
4	齋藤 祐月	男	1組	9	野澤 蓮	男	2組
5	齋藤 啓太	男	1組	10	佐々木 聡太	男	2組

<成果と課題>

参加した子どもに対して行ったアンケート設問「また海外のプログラムに参加したいと思いますか？」の結果で、参加者10名中6名が「とてもそう思う」、4名が「どちらかと言えばそう思う」と答えた。充実した17日間であったことが分かる。

事業参加者からは、下記のとおり感想が述べられた。

▼私は将来、海外で働くことをめざしているので、この経験を生かして海外の人とコミュニケーションをとったり、今よりも英語力を上げるためにたくさん勉強して行きたいです。

▼私が今回のホームステイで学んだことは、言葉の大切さです。今何気なく話している母国語でも、他国の人からしたらとても難しいということを改めて知ることができました。なのでこれからはいろんな国の言葉を学んでいきたいです。

ホームステイ事業の目的の一つである「語学力の向上」は達成できたようである。ホームステイ事業のみならず、英語検定料の助成やALTの活用等を、和木町の英語教育への位置付けと価値付けを更に明確にし、児童生徒の地力を蓄えたい。また、町民にも広く伝えていきたい。

(3) 生徒指導の取組

① 大竹・和木・岩国地区青少年関係機関連絡協議会

3市町教育委員会関係者と関係機関の出席のもと、子どもたちの健全育成に向けて情報共有を行った。SNS やスポーツクラブの関係で子どもたちの交友関係が広がっており、担当者どうしても県や市町を越えて顔が見える関係づくりをしておくことで事案発生時には迅速に協働した対応ができる。

② 教育相談室「スマイルルーム」の開設

平成9年4月より、教育委員会事務局に専属の教育相談員2名を配置し、不登校児童生徒等の支援、本人及び保護者からの相談に応じることができるようにしている。本年度の在籍児童生徒は9名である。

本年度から、児童生徒の個に応じた支援を図るため、児童生徒用タブレット端末と Wi-Fi 環境を整備し、学習や日々の記録に活用している。学習用 AI ドリルでは、個々の学習進度に応じたレベルの問題が学年を遡って提示されることから、不登校の児童生徒にとって有効なツールとなっている。

また、学習だけでなく、多様な体験活動の場を提供することで「スマイルルームに行きたい」、「もっといろんな活動をしてみたい」といった子どもの意欲を喚起するよう努めている。隣接している文化会館や美術館では、年間を通じて様々なイベントが企画されており、教育相談員が引率して在籍児童生徒も参観した。11月には初めての試みとして蜂ヶ峯総合公園で校外学習を実施した。在籍児童生徒で校外学習について話し合い、行き先や日程、費用等を教育委員会に相談し、実現に至った。不登校児童生徒にとって、自分でバスに乗り、屋外で散策したり、施設の方にインタビューしたりする体験は、自立に向けての大きなステップになったことと思われる。今後も不登校児童生徒の居場所として、また自立に向けて効果的な支援を図る場所として機能の充実を図りたい。



○ 教育相談室	『スマイルルーム』
・ 場 所	和木中学校体育館 2階
・ 電 話	(0827) 52 - 2165

③ 和木町いじめ問題対策協議会

本会議は、本町におけるいじめの状況や背景・要因等について、学校、教育委員会、関係機関等が連携して協議し、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努める目的で設置されている。広い視点からの学校支援が可能となるように、保健福祉部局や児童相談所職員にも参加を依頼している。

6月、10月、1月の3回実施し、学校からのいじめの現状についての報告及び対応についての協議を行うとともに、委員に対する研修を実施した。研修内容としては、令和4年12月に改訂された生徒指導提要における「生徒指導の4層構造」の理解、いじめ予防に係る児童生徒主体の取組、文科省『警察に相談又は通報すべきいじめの事例』についての理解である。

④ 和木町「面接相談」

臨床心理士（玉田和子先生）を迎え、下記の内容で年12回の和木町「面接相談・すすく相談」を実施した。相談場所・受付ともに保健相談センターで行うことで、保護者がより相談しやすい環境づくりをめざした。

ア 目 的

- ・不登校等問題を抱える児童生徒及びその保護者並びに学校に対する効果的な支援を行うため、本人・保護者・学校関係者等との面接相談を通して、3者の連携を図りながら課題解決に向けての適応指導ができるようにする。
- ・乳幼児をもつ保護者の子育てを支援し、幼児教育を充実させるとともに、義務教育への滑らかな接続を図る。

イ 実 績

- ・毎回2枠の相談枠が予約で埋まるような状況である。特に、秋以降の相談が増えており、保護者のニーズが高まっている。保護者の悩みに寄り添った面談を実施するとともに、必要に応じて保健福祉課や学校、教育委員会等関係機関につないでいる。

⑤ 山口県スクールカウンセラー活用事業

いじめや暴力行為などの児童生徒の問題行動や不登校などへの対応に当たっては、学校におけるカウンセリング等の機能の充実を図ることが重要な課題となっている。

このため、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有する「スクールカウンセラー」を予め指定する学校を所管する市町教育委員会に派遣し、小・中学校における活用を行い、もって、児童生徒の問題行動等の解決及び健全育成に資することが本事業の主なねらいとなっている。

本年度は、堀尾紫乃先生が和木小学校、和木中学校に延べ 156 時間勤務し、児童生徒や保護者との面談、教職員とのカンファレンス、授業や休み時間の様子の観察等を行った。また、本年度からの事業として、「中学校及び高校 0 年生からの教育相談事業」が開始された。小学校 6 年生と中学校 3 年生の児童生徒を対象として、入学後の教育環境の変化や新しい人間関係に対し、不安や悩みを抱え、支援が必要とされる児童を入学前に把握するとともに、支援児童に対する入学前後の支援の体制を充実させることで、いじめ・不登校等の未然防止を図ることを目的として実施した。3 月～4 月は進学する児童生徒にとっては環境の大きな変化から心理的なストレスや不安感が大きくなる。カウンセラーが途切れることなく支援することで、児童生徒に寄り添えるように努めている。

⑥ SSW（スクールソーシャルワーカー）派遣事業

いじめ等の生徒指導上の諸課題に対して、福祉等の専門的な知識・技術を有するスクールソーシャルワーカーを中核に据えた生徒指導・教育相談体制の充実・強化を図るため、本町は県教育委員会から 3 名の SSW（高木裕美先生、上田克典先生、松谷恵子先生）の派遣を受けている。特に長期欠席の児童生徒について、家庭への支援、関係機関を交えたケース会議への参画、関係機関との連携の役割を果たしている。また、SSW チームミーティングを 3 回開催し、教育委員会、保健相談センターとでケースの進捗状況の共有を図っている。

（４） 学校保健・安全教育

① 和木町学校保健会

8 月に学校保健会総会を実施した。こども園及び小中学校の健康診断における現状や、ポストコロナの学校行事等のあり方について情報交換を行った。また、今年度は講演会を実施せず、代わりに各診療科から子どもたちの健康面についての情報提供をしていただいた。酷暑の中での熱中症対策（特に登下校時）、若年層に広がるオーバードーズ（市販薬の過剰摂取）問題について等が話題となった。

② 校医一覧（令和 5 年度）

	学 校 医	学校歯科医	学校眼科医	学校耳鼻科医	学校薬剤師
和木こども園	木 村 俊 之 平 野 雅 俊 平 野 有 美	竹 野 勇 都 増 木 恒 平			佐々美加子 海 井 朗 弘

和木小学校	木村俊之 平野雅俊 平野有美	竹野勇都 増木恒平	後長道伸	高田洋美	佐々美加子 海井朗弘
和木中学校	木村俊之 平野雅俊 平野有美	竹野勇都 増木恒平	後長道伸	高田洋美	佐々美加子 海井朗弘

③ わきスクールガード

本年度の登録者は20名である。ジャンパー、ベスト、腕章等を各ボランティアに配付し、日々の児童生徒の登下校の見守りをしている。小学校において、スクールガード感謝の会を開催し、つながりや交流づくりのきっかけとしている。

④ 園小中合同引き渡し訓練及び防災士による出前授業

本町においては、園小中合同避難訓練と合同引き渡し訓練を隔年で実施している。町教頭会を中心に計画を立て、今年度は5月30日に合同避難訓練を実施した。土砂災害による避難指示を想定した避難訓練であり、自治体の情報伝達訓練と併せて行った。こども園の園児は中学校に移動し、中学生とペアになって校舎3階まで垂直避難した。町の危機管理監や岩国消防署東出張所、防災士と連携し、緊急時の伝達系統と避難経路、避難手順を確認する機会となった。

また、避難訓練後は中学校3年生を対象に、防災士による出前授業を以下のとおり実施した。

【ねらい】

- ・想定される地震・津波に対する避難訓練を行うことを通して、自分の命を守る行動の意識（自助）と、みんなで避難する態勢（共助）を確認理解する。
- ・自分の命を守り、人々の生活に寄与できる中学生であるために防災訓練を体験し、防災知識の習得をする。

【グループワーク】

中学校の体育館に避難所が開設されたとき、中学生として「僕たち、私たちに何ができる？」をテーマにグループ活動を行い、自分たちのできることを、付箋を使ってペーパーにまとめた。各グループに地域の方がアドバイザーとして入り、また、防災士が全体を巡回し、グループ活動の支援を行った。

【防災クイズ】

防災士が、防災に関する〇×クイズを出題し、グループごとに回答しながら防災についての基礎知識を学んだ。

【カタリ場】

活動1のグループワークでまとめたことを題材に、中学生と地域の方、防災士が自由に意見交換を行った。

【成果と課題】

- ・講師の防災士が準備からすべてを行ったため、教員の視点ではなく、専門的な視点でグループワーク、〇×クイズを行うことができた。
- ・地域のことをよく知る地域の方がアドバイザーとして助言を行うことによって、生徒の思考が深まり、より具体的な行動を想定して活動することができた。



防災士とのグループワーク

⑤ 和木町通学路安全推進会議

通学路をはじめとする道路の交通安全に関しては、これまでも地域関係機関や地域住民と連携しながら、道路交通環境の整備を行ってきたところであるが、全国的には近年、登下校時の児童等の列に自動車が突入し、死傷者が多数発生する痛ましい事故が相次いでいる。

このような状況を踏まえ、関係機関が相互に連携し、通学路における交通安全を確保することを目的として、7月26日に通学路安全推進会議を実施した。

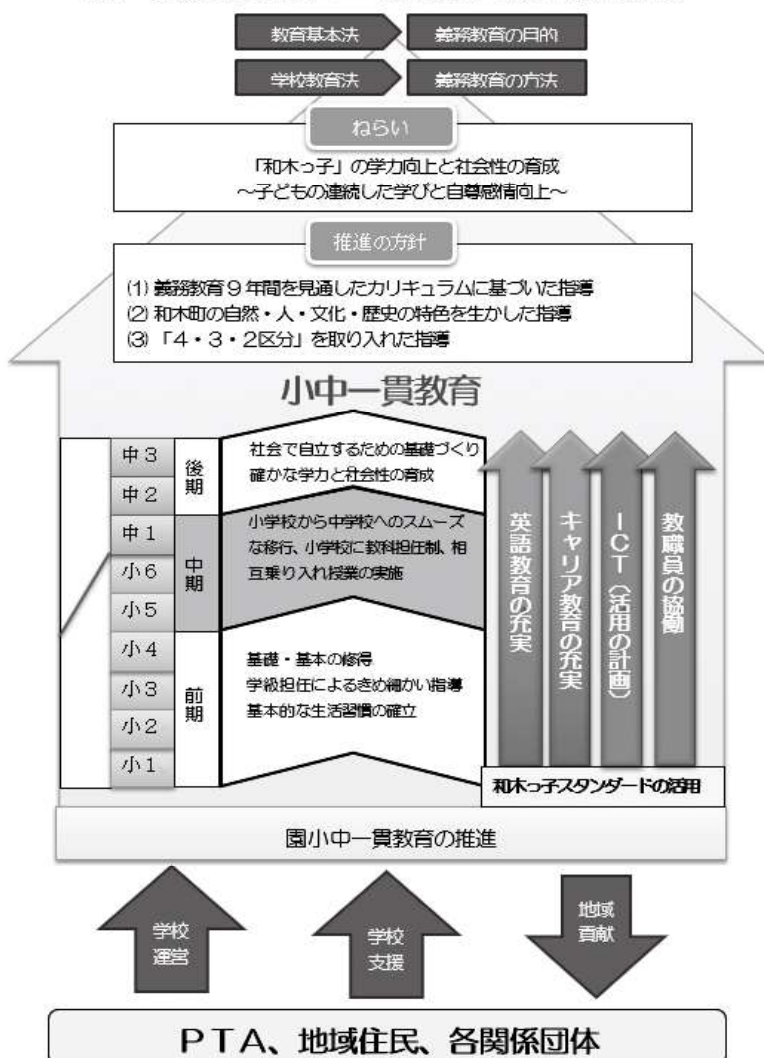
小・中学校通学路の危険個所の状況確認を GoogleEarth を用いて実施し、対策メニューを検討するとともに、昨年度作成をした和木町安全マップ及び防犯マップの確認と見直しを行った。

2 園小中の連携

(1) 園小中一貫教育の推進

平成 31 年 4 月に、和木中と隣接して新園舎による幼保連携型認定こども園が開園したことにあわせて、園小中連携の具体的な活動を開始した。中学生がこども園を訪問し、読み聞かせ活動や環境整備活動を進んで行うなど、子ども同士がつながる活動に発展している。小学生と中学生の連携においても体験授業などのカリキュラムを組み、小中連携の具体的な取組を行ってきた。園小中一貫教育の地域連携カリキュラムや保幼小連携カリキュラムについては、教職員や地域住民で定期的に見直しを行い、PDCA サイクルを回している。

和木町が進める園小中一貫型教育（和木学園構想）

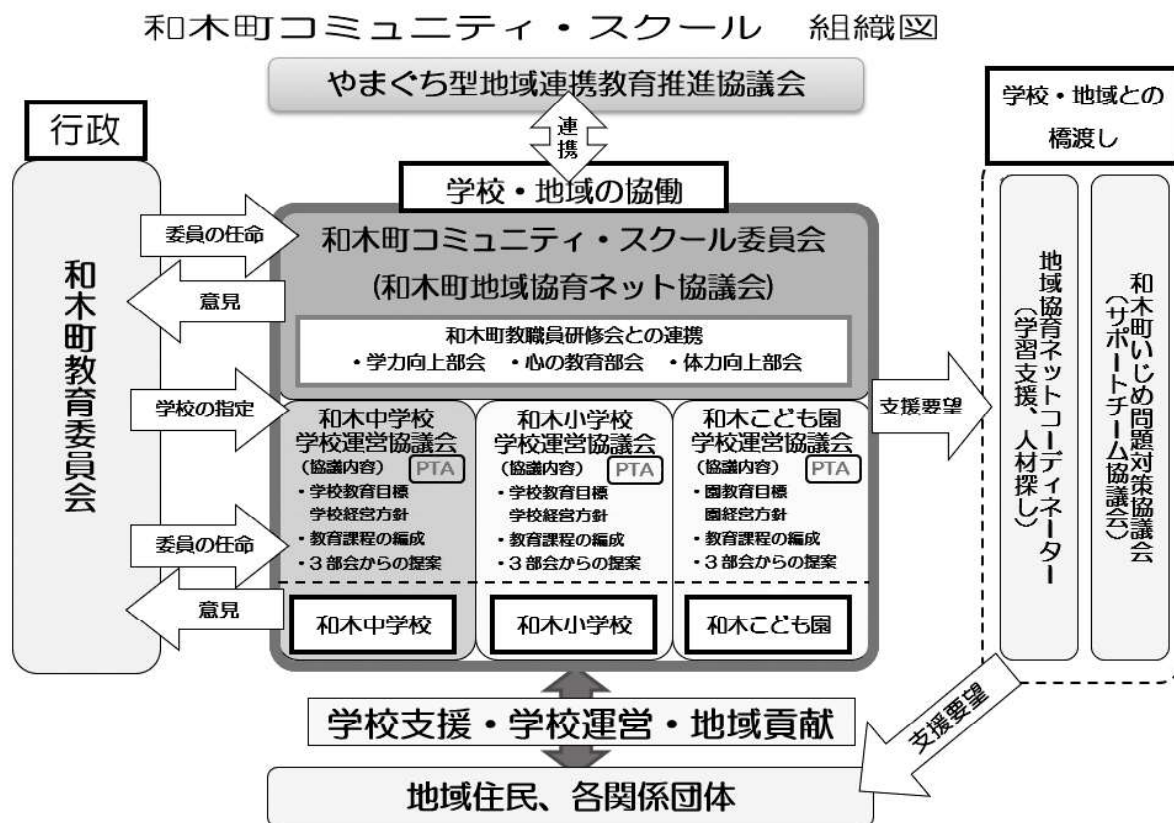


(2) 和木町コミュニティ・スクール

コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会が設置された学校のことをいい、その学校では保護者や地域住民等が学校運営に参画し、学校と地域が協働して子どもを育てる仕組みがある。本町のこども園、小学校、中学校はいずれもコミュニティ・スクールである。学校と地域住民等がみんなでよく考え、話し合い（熟議）、子どもの教育に関して、同じ目標に向かって、一緒になって活動し（協働）、校長を中心に、人をつなぎ、学校の組織としての力をうまく引き出すこと（学校のマネジメント）を通して、子どもの豊かな学びを確保するとともに、学校にかかわる大人たちの成長も促し、ひいては地域の絆を深め、地域づくりの担い手を育てていくことをねらいとしている。

本町では、平成 26 年度から園小中の運営及び連携を円滑に推進するために必要な事項を協

議する機関として、和木町コミュニティ・スクール委員会（以下 CS 委員会）を設置している。年に 3 回の委員会で協議するとともに（具体的な協議事項については社会教育の項参照）、ICT 教育合同研修会等にも参加し、学校や子どもたちの様子を把握してもらっている。



(3) 和木町教職員陶芸教室

本年度も和木町教職員の個性を知ってもらうとともに、じっくりと芸術に向き合う機会をつくるため、陶芸作品の制作研修を企画した。また、希望者にはやきもの工房において電動ろくろ体験を行った。地元の陶芸家である宮本健吾氏に、講師として協力いただいた。素焼きの器への絵付け作業では、教職員の個性的な作品が仕上がり、園小中や文化会館において展示した。

<成果と課題>

平成 28 年度から小中一貫教育が制度化され、学力向上やいわゆる中 1 ギャップの緩和、教職員の意識・指導力の向上等、全国的な小中一貫教育の成果が報告されている。県内においても、小中一貫教育の推進が求められている。全国的な取組は、今後更なる進展の見込みがある。

本町においては、園小中一貫教育の推進に向けて 8 年目となった。一貫教育の柱を「英語

教育の充実」、「キャリア教育の充実」、「ICT（活用の計画）」、「教職員の協働」とし、“15 年間のカリキュラム”をもとに授業実践を行っている。また、架け橋期プログラムをもとに、園小による架け橋カリキュラムを作成し、それをもとに園小のより深い連携をめざした取組を実施したり、和木学園勉強週間や小学 6 年生の中学校での体験授業や部活動体験などの取組も定着したりしている。

来年度は、会議や熟議の場に子どもたちが参画できるようにすることで更なる活性化をめざしたい。また、和木学園について子どもたちとともに考える場を設け、「自分たちの和木学園をつくろう」をコンセプトにした活動の深化・充実を図りたい。

3 ICT 研修

(1) 和木町 ICT 導入状況及び研修体制

和木町では、児童生徒の ICT 活用能力を高めるために、平成 21 年度から各種設備の充実を図ってきた。令和 3 年度からは、国の GIGA スクール構想により、本町においても小 1～中 3 までの児童生徒に一人 1 台のタブレット端末が貸与され、より一層 ICT 教育が加速することとなった。町教委としては、小中学校校舎に無線 LAN を整備するとともに教師用タブレット端末を貸与することで、クラウドを活用した授業での協働学習を進めている。

年間 3 回（今年度は 6、12、1 月）、最先端の ICT 活用を研究している講師（中村学園大学教育学部教授 山本朋弘氏）を招聘し、和木町 ICT 教育合同研修会を開催し、ICT 教育についての研修を推進している。これまで、タブレット端末を活用した授業研究のスタイルを取ってきたが、今年度からは参観する教職員や地域住民もタブレット端末を活用して研究協議を行った。大判用紙と付箋を使って協議を行うことと比べて、授業を参観しながらその場で気づきを入力できる点、他の班の意見も容易に参照できる点、記録の蓄積が可能な点、紙やインクを削減できる点から効果が大きかった。また、子どもたちが使っているタブレット端末と同じものを使って研修することで、タブレット端末のよさを体験できたことも成果である。



第 2 回 ICT 教育合同研修会の様子

また、児童生徒のタブレット端末の持ち帰りを開始し、家庭学習でタブレット端末の活用が始まっている。不登校児童生徒についても必要に応じてタブレット端末を持ち帰らせている。オンラインで家庭と学校をつなぎ、教員と面談したり授業の様子を中継したりした。さらに、スマイルルーム教室でもタブレット端末を活用した学習を始めている。今後もこうした活用場面を増やしていきたい。

(2) ICT 推進員

① ICT 推進員とは

ICTを活用しやすい環境づくりを支援し、先生方が、コンピュータ環境を有効に利用し、児童・生徒にとって価値の高い情報教育(コンピュータによる双方向コミュニケーション、創造的学習活動 等)を推進できるように、また、ICTの効果的な活用により、児童生徒の学びへのモチベーションづくり、更には学力向上につながるように、様々な面からのサポートを行う支援員である。

② 主な業務内容

【授業にあわせて】	【先生向け講習会】	【校務支援】
<ul style="list-style-type: none">・ティームティーチング・ワークシートの準備・リンク集の作成・ソフトの紹介 など…	<ul style="list-style-type: none">・アプリケーションの研修 (一般ソフト、教育ソフト)・ハードの使い方 (PC、周辺機器、ネットワーク) など…	<ul style="list-style-type: none">・各種資料の作成支援・ホームページの管理支援・PC環境チェック・CBTに向けた事務作業・トラブル一次窓口 など…

<成果と課題>

今年度は、ICT 推進員(山本恵美子氏)が毎週1回ずつ小中学校でサポートを行った。担当教員への負担はある程度軽減されたが、勤務日数や勤務時間を増やす等、まだ改善の余地はある。来年度以降も、支援員を有効活用しながら、ICT 機器の効果的な使い方を探り、授業改善を推進したい。

国の GIGA スクール構想の下、今後も一人1台タブレット端末の活用と児童生徒主体の授業づくりは更に求められることが考えられる。生成 AI の授業や校務での活用や不登校児童生徒への支援における活用等、山本朋弘氏に町全体の指導を継続して行っていただくことで、最先端の授業づくりを追求したい。

4 和 木 こ ど も 園

1 和木こども園の教育

未来を拓くたくましい「やまぐちっ子」の育成（山口県教育委員会）



ふるさと和木に誇りと愛着をもち、和木の将来を担う人づくり（和木町教育委員会）

・自ら意欲的に学びに向かう子ども ・思いやりのある子ども ・進んで実践する子ども（めざす子ども像）

未来に輝くわきっ子の育成～心ゆたかにたくましく～

○遊びを通して、自発性・道徳性・創造性の芽生えを培う。

○基本的生活習慣の形成と、生きる力の基礎を育成する。

○身近な自然や人々との触れ合いを通して、豊かな感性を育む。

◎ がんばる子

めざす 園児像

◎ やさしい子

◎ かんがえる子

がんばる子

◎ げんきな子

かんがえる子（知）	やさしい子（徳）	げんきな子（体）
<p>(1) 教育課程の編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 長期的な視野・充実した園生活の展開 ○ 発達段階に即した適切な環境の構成 ○ 豊かな経験や体験を重視した指導計画 <p>(2) 保育指導の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発達の特性に応じたきめ細かなかわり ○ 乳幼児の自発的な活動を引き出す保育指導 ○ 支援を要する園児の支援と援助 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携を密 ・自立の支援・援助 	<p>(1) 情操教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな感性の育成 <ul style="list-style-type: none"> ・感動や心に残る出来事を友だちや保育者と共有 ○ 身近な自然や社会とのかかわりへの興味関心 ○ 継続した絵本の読み聞かせよる読書習慣のきっかけづくり <p>(2) 道徳教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 繰り返しの習慣作り <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする ・はきものを揃える ・人の話を聞く ○ 人権感覚を育む保育の展開 	<p>(1) 健康・安全教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 基本的生活習慣の育成 ○ 家庭・地域との連携による交通安全指導 ○ 安心、安全な園生活 <ul style="list-style-type: none"> ・けがへの対応 ・不審者への対応 ・園舎や遊具の安全管理 ○ 運動や遊びの充実 <p>(2) 生活習慣の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自立を促すための基本的生活習慣の基盤の育成 ○ 一人ひとりを生かした集団の形成及び相互にかかわる力の育成

園経営方針

- 「尊師親愛生」の精神を基調とした豊かな経験や、ふれあい活動を促す環境を構成する。
- 心身ともにたくましく豊かで調和のとれた乳幼児の育成、生きる力の育成に努める。
- 乳幼児の発達課題をクリアし義務教育への滑らかな接続を図るなど、発達や学びの連続性を意識した小学校・中学校との密接な連携を図る。

(3) 本年度の努力点

- 継続した運動遊びやリズム遊びを計画的に実施し、体を動かす体験をさせ、基礎体力を付ける。
- 交流活動（地域、小中学校、園内異年齢）を通して、「どうしたの?」「だいじょうぶ?」「ありがとう!」と素直に言える心を育てる。
- 子どもたちが「やってみたい!」「やってみよう!」という意欲をもてるような保育環境づくりに努める。
- 絵本や会話の中でできた言葉遊びを楽しみ、経験を重ねて言葉を増やしていく。
- 共感したり、ほめたりすることで、自己表現力を育て自信をもたせる。
- 再編成した架け橋期のカリキュラムを実践して、つながりを意識した教育・保育活動を行う。
- ネイティブな英語に親しみ、単語で思いを表現できる力を養う。

園運営協議会

家庭連携

地域連携

園小中連携

2 確かな学力の育成

(1) はじめに

本園は、期待する園児像として、『かんがえる子』『やさしい子』『げんきな子』『がんばる子』を掲げている。この期待する園児像を育む活動の一つとして、製作活動があげられる。製作活動の中では、「どうやって作ろう?」「こうしたら上手にできた!」と考える力や、友達に道具を貸してあげたり、やり方を教えたりするやさしい心、完成を楽しみにしながら最後まで頑張る力など、保育者と子ども、子ども同士のやりとりが自然と増えることで様々な力が育まれている。今回は年長児が数々の製作活動で折り紙を使用し、豊かな表現力を身に付けるとともに、ICT を効率的に活用している事例を取り上げる。

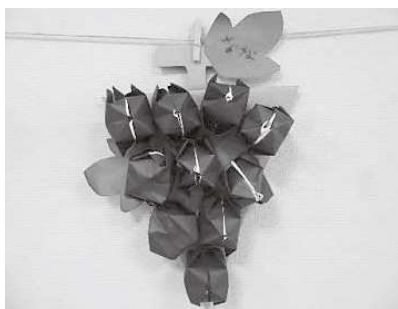
(2) 実践事例

今年度、年長児は、製作活動に意欲的に取り組む姿が見られ、一人ひとりの個性あふれる作品ができています。しかし、折り紙に対しては、苦手意識をもっている子どもが多いように感じている。そこで、比較的簡単で基本的な折り方を身に付けるため、『かぶと』を折った。この製作をするとき、苦手意識がある子どもはすぐに「難しい」「わからない」と投げ出そうとする姿が見られた。保育者が教えようと声をかけると頑張って折ろうとするが、一つの工程が終わる度に「できない」や「わからない」と言い、自分で考えなくなり、すぐに頼るようになった。

この苦手意識を克服させたいと考え、同じものを繰り返し折ることで、折り方を理解し、折ることができるようになれば、自信が付き、折り紙が楽しくなるのではないかと考えた。

そこで、折ったのが『風船』である。風船を折るためには、まず三角に2回折り、折り目を付けて、一度開いて四角に2回折る。折り紙の基本的な折り方がどちらも入っているので、そこからゆっくりと教えていった。次は、ふくろ折りをする。この折り方が子どもたちにとってはとても難しかったが、この折り方ができるようになれば折り紙の幅も広がっていくと考え、根気強く子どもたちと一緒に折っていった。

風船を折って、最初に作った作品がぶどうだった。完成図を見せてから、製作を始めていくことで、折り紙が苦手な子どもぶどうを完成させるために頑張ろうという意欲をもって取り組むことができた。



折り紙では、保育者が実物投影機を使用してテレビに映しながら折り方を説明し、クラス全体で一緒に進めていくことが多い。しかし、今回のぶどうの製作では、風船を一人10個作ることになる。当然、個人差が出てしまう。まずは、普段通りに保育者が一斉に折り方を教え、一緒に折った。それから、個人のペースで折り紙に取り組むことができるよう、事前に保育者が子どもたちの折るスピードに合わせて、タブレット端末で撮影したものをテレビで繰り返し再生した。子どもたちは、それを見ながら進めていった。そうすることで、折り紙が苦手な子もテレビを見ながら、次はどうやって折るのかを考えて自分の力でやってみようという意欲が見られるようになった。回数を重ねることで、コツをつかみ上手に折ることができるようになり、苦手意識がなくなってきた。

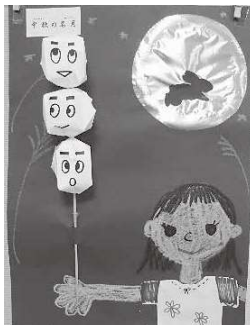
その後も、さまざまな作品で風船を折って、作っていった。

お月見団子

ハロウィンおばけ

りんごとかき

クリスマスリース飾り



(3) 折り紙製作活動を通して

今回の折り紙製作で、折り紙に対して苦手意識をもっていた子どもが自由遊びの時間に「折り紙を使ってもいい？」と積極的に折り紙を使って、遊びに取り入れたり、風船以外の折り紙製作にも意欲的に取り組んだりする姿が見られるようになった。そして、タブレット端末を活用したことで、クラス全体で活動している中でも、一人ひとりのペースも大切に活動ができたのではないかと感じる。

また、折り紙が得意な子が、苦手な子に対して教えるとき、始めのうちはその友達の折り紙を折ってあげて教えていたが、だんだんと教え方が上手になり、「ここを合わせて折るんだよ」と言葉で伝えながら教えるようになっていった。

(4) 今後の課題

現在、こども園では主に製作活動の中で実物投影機を使用して、折り紙の折り方や作品の作り方を説明したり、はさみやのりなどの道具の使い方を伝えたりしている。今回は、年長組でタブレット端末を使用した事例をあげたが、今後は各学年でタブレット端末を活用していき、年齢に合った活用方法を園全体で共有し、ICTの活用をより一層充実したものにしていきたい。

3 豊かな心の育成 ～いい言葉の日～

(1) はじめに

和木町では、園・小・中ともに、子どもたちが言葉を大切にする意識をもち、相手も自分も大切にする気持ちと思いやりの心を育てようと、毎月 11 日を「いい言葉の日」としてしている。園では、まず「いい言葉」とはどんな言葉なのか気付き、「いい言葉」を見つける中で、様々な人たちとのつながりが深まっていくようにしていきたいと考えている。

(2) 取組の様子

本年度は「いい言葉の日」に関する取組として「言われて嬉しかった言葉」や、「耳にして温かい気持ちになった言葉」などを花型の紙に書き、「いいことばのき」として掲示をしていくことにした。園内では、子どもたちを中心に年齢に応じて、この活動に取り組んでいる。文字に興味をもち、自分で書こうとする子どもは自ら書いたり、書くことが難しい園児は、担任と一緒に書いたり、代筆したりする。また、クラスで「いい言葉」を見つけあったり、話したりしたことを書くことによって、「いい言葉」の花が少しずつ増えてきている。さらに、この取組について保護者に手紙を配付し、親子の会話や日常生活での「いい言葉」に目を向け、親子で一緒にこの取組に参加してもらえるようにした。「いいことばのき」は廊下に掲示し、いつでも誰でも目を向け、友達が気付いた「いい言葉」を知ることや、自分が書いた「いい言葉」に自信をもつことができる。「いい言葉」を見て、温かい気持ちになって、毎月 11 日のみならず、「いい言葉」を日頃から意識できるようになっている。

(3) おわりに

実際「いい言葉の日」には意識することができていても、日常的に意識を向けることは難しく、遣っていることに気付いていないことも多い。しかし、多くの人の目に触れる場所に「いい言葉」を掲示し、目に見える形にすることで、保育者はもちろん、子どもたちや保護者までも「いい言葉」を意識して使用するようになってきた。また、「いいことばのき」の取組を通して、親子での会話のきっかけになったり、お互いの感謝の気持ちに気付いたり、日常の中で他の人の「いい言葉」に目を向け、その気持ちを伝え合ったりして、「いい言葉」の温かさに気付いている。今後は、他のエピソードに目を向け、「自分も言われたら嬉しいな」「私もこの言葉を伝えてみよう！」と「いい言葉」の連鎖が広がり、この先も「いいことばのき」に花が増えていくことを願っている。



4 健やかな体の育成

(1) はじめに

近年、生活の利便化や室内遊び時間の増加などの要因が絡み合い、子どもたちが体を動かす機会が減少してきている。そのため、体力や運動能力が低下しつつある。体を動かす楽しさを経験するために、本園では、継続した運動遊びやリズム遊びを計画的に実施し、基礎体力を付けることに努めている。特に効果的な運動や遊びの充実を図るために、様々な活動を取り入れている。その一つとして、R2年度から毎年、「SPORTS CLUB キャプテン」から指導者を招き、運動教室を行っている。各学年、発達段階に合わせた内容で、子どもたちに指導しながら、楽しく活動している。そこで今回、年長児が運動会に向けて走ることに着目し、運動教室の下に取り組んだ事例を取り上げる。

(2) 実践事例

運動会が近づいていることで、子どもたちもかけっこやリレーでは「勝ちたい。速く走りたい」という姿がみられる。今回は、走るときの体の使い方やリレーで速く走る方法等について2回に分けて指導を受けた。

まずは、指導者の自己紹介から始まる。子どもたちが楽しく参加することができるよう雰囲気づくりに配慮する。継続的に来ているので、子どもたちも指導者の顔や名前を覚えており、運動教室を楽しみにする姿がみられた。

次に準備運動としてストレッチを行う。ただ、足や腕を伸ばすだけでなく、言葉がけをしながら、または遊びながらストレッチをすることで、子どもたちも嬉しそうに参加した。



① 走りの基礎

主に、かけっこで走るときの基礎等の指導。

ア 「いちについて よーい」のポーズ

スタートで構えるときに、同じ手と足が前に出やすい。「右手が前なら左足を前に出すと、『よーい、ドン！』のときにすぐにスピードがでるよ。同じ向きの手と足が前だとロボットになるよ！」と理由を交えながら、指導を受ける。

イ 小道具を使った、走り方のコツ

フラフープを使って1つずつ輪をまたぎながら走る活動。

(ア) 直線配置のフラフープ

足が上に上がり、前に出す動きにつながる。

(イ) くねくね配置のフラフープ

フラフープの位置に合わせて体の向きを変えながら走ることで体幹の強化や、トラックのカーブに沿って走れるようになる。

直線のフラフープ



くねくねのフラフープ



② リレーで勝つためのコツ

ア バトン渡しゲーム

どちらのグループが速くバトンを渡せるか競い合う。バトンを手のひらでもらう大切さを学ぶ。

イ 2グループのリレー対決

友達を応援する。後ろが気になっても前を向いて走るよう学ぶ。

ウ 学年全体でリレー対決

指導・助言を受けたことを踏まえて、クラス対抗でリレーをする。「こうしたら勝てるかも」という気持ちが出始め、応援や走りに気合が入っていた。

バトン渡しゲーム



(3) 運動教室を終えて

後日、かけっこのスタートの練習をしてみると手と足を出す向きを意識する姿が増えてきた。しかし、今までの癖を直すのは難しく、直そうとしても手と足の向きに混乱していた。子どもたち同士で、「ロボットになっているよ!」と声を掛け合う姿があり、少しずつ上達してくる。かけっこだけでなく、リレーの練習も積み重ねていくうちに闘争心が出始めてきた。「どうしたら勝てるかな?」と子どもたち同士で考え合う姿が多くなり、今回の運動教室を経験したことで運動会に気持ちを高めるよい機会となった。

(4) 今後の課題

専門家から指導を受けることで、普段の教育・保育とは違った活動に子どもたちが興味関心を示す姿がみられる。教えてもらったことを継続的に教育・保育活動に取り入れることで、子どもたちの体力向上にもつなげていけると考える。学んだことを他学年とも共有し、乳幼児期の遊びを大切にしていきたい。

5 園小中連携教育

(1) 園小連携のねらい

園小連携は、幼児期の教育と児童期の教育を円滑に接続することが重要である。そこで、本園では架け橋期カリキュラムを軸として、10の姿を意識した体制を整えた。特に連携窓口の確認や情報共有の徹底など子どもの発達に視点をもって研修し幼児は小学校への期待感、児童は自らの成長に対する充実感を感じることができることをねらいとしている。

① 園小連携の実際

11月 1年生との交流（学校探検・ふれあい）

2年生との交流（おもちゃまつり）

1月 1年生との交流（製作）

1年生とのこども園でひらがな探し（タブレット端末使用）

3月 入学に向けての園小連絡協議会



（11月 学校探検・ふれあい）



（おもちゃまつり）

11月の交流（学校探検・ふれあい）の日には、ペアとなる相手の名前や顔を覚えることを意識した内容だった。じゃんけんゲームをしてふれあったり、校内を案内してもらったりした。中でも、ペアとなった1年生に、図書館で絵本を読んでもらった時間は、憧れや親しみといった心のつながりをつくる大切な時間となった。

2年生との交流（おもちゃまつり）は、手作りおもちゃを使ったゲームが多く、2年生の説明や案内で優しさにふれる機会となった。



（1年生との交流 R4）



（ひらがなさがし R4）

② 成果と課題

就学を意識した交流活動の中で、子ども同士の気持ちのつながりを大切にするため、活動の前には、必ずふれあいの日をつくった。名前や顔を事前に知ること、メインの活動に安心して参加でき、それが自然と就学へのワクワク感につながっていった。また、

事前に教員の交流や情報交換の機会を大切にすることで、活動がより充実し、共に大切にしたいことが見えてくることを実感した。今後も職員のつながりが子ども同士のつながりへと続いていくことを意識し、交流活動を盛り上げていきたい。

(2) 園中連携のねらい

園中の連携は、園児とのかかわりが中学生にとってはキャリア教育となり、園児との遊びを通して自己肯定感を高め、園児をはじめ、保育者、家族を理解することにつながっている。また、園児にとっても、中学生とのかかわりで優しさに触れ、人とかかわる楽しさを学ぶ経験をすることで、豊かな感情を抱くことをねらいとしている。

① 園中連携の実際

7月 中学校教員による和木町ストレッチ・生徒による夏休み水やりボランティア

9月 体育祭の予行見学（リレーや徒競走）

10月 こども園運動会の手伝いボランティア

11月 中3家庭科保育実習（手作りおもちゃを使用した遊び）

※通年、避難訓練の避難場所として中学校グラウンドを活用



(和木町ストレッチ)



(水やりボランティア)



(運動会ボランティア)



(中学校家庭科)

② 成果と課題

中学生との交流活動は、ボランティアとしてこども園のサポートをしてもらう機会が多い。中学生にとっては、人の役に立ち、喜んでもらえるという社会貢献意識を育む効果もある。また、旧和木幼稚園出身の生徒も多く、お世話になった先生と再会し、声を掛けてもらったり、現在の成長を感じてもらったりする経験が、自己肯定感や郷土愛を育む機会にもなっている。園児にとっては、中学生に憧れを抱き、甘えていく姿もとても微笑ましい。今後も、隣接している立地条件を生かし、行き来を密にすることで、和木の子どもたちを共に育てる意識をもち、教育的にもサポートをしやすい関係づくりを進めていきたい。

6 園内研修

研修主題 「実践してみよう！架け橋期までのカリキュラム～10の姿でつながろう～」

今年度は上記のテーマで研修を進めている。今までの教育・保育に「小学校への接続」を意識した取組をテーマとした。

ここであげている「架け橋期までのカリキュラム」とは、0歳児～5歳児までの年間指導計画とかけはし期のカリキュラムをさす。指導計画のねらいを意識した教育・保育を実践し、保育者相互でカリキュラムを見直しながら、教育・保育の工夫点や環境構成などを振り返っていく。また、それを学年を超えて共通理解を図ることで、子どもたちの育ちの連続性を保障し、子どもの様子に合わせた柔軟な対応につなげていく。

また、子どもたちの育ちは、「10の姿」を通してもとらせることができ、園内のつながりだけではなく、小学校との接続（レインボー期）においても欠かせないものであることがわかった。そのため、今年度も指導案作成時や振り返りに「10の姿」を活用している。

そして、ICTの活用についても、昨年度に続き今年度も園内で取り組んでいる。ICT教育の研修主題である、「豊かな表現力が身に付く、ICT機器の効果的な活用」を踏まえ、タブレットや実物投影機の活用方法を園内で情報共有し、効果的な活用ができるよう実践を積んでいる。

令和5年度 園内研修

日時	内容	担当
4月19日	今年度の課題（ICT活用・10の姿・カリキュラム）／「こいのぼり大作戦（こいのぼり上げ式）」	森本
5月17日	アレルギー、加配が必要な子どもの情報共有	本田
6月21日	「七夕大作戦（七夕まつり会）」	森本
7月19日	発達障害の理解 鈴木先生（岩国総合支援学校 Co）	藤野
8月3日	乳幼児のための救急・救護講習	本田
9月20日	♡年間指導計画（1学期）ねらいに対する工夫点など（学年を超えてシェア）	杉岡（森本）
10月18日	「ハロウィン大作戦（ハロウィン）」	杉岡（森本）
11月22日	「クリスマス大作戦（クリスマス会）」	杉岡（森本）
12月20日	♡年間指導計画（2学期）ねらいに対する工夫点など（学年を超えてシェア）	杉岡（森本）
1月17日	気になる子どもの情報共有	岸本
1月29日	第3回 ICT 教育合同研修会（こども園）	杉岡（森本）・年長
2月21日	10の姿に基づく園小の連携/新採・中堅教員研修報告	松田・大田
3月15日	来年度の努力点の検討	佐伯・岸本・松井

7 学校（園）運営協議会

（1）ねらい

保護者及び地域の住民等が、こども園の運営に積極的に参画することにより、地域住民等の意向を園運営に的確に反映し一層地域に開かれた信頼される園づくりを実現するため、園の運営に関して協議することをねらいとする。

（2）協議会委員

本園に運営協議会が設置され、コミュニティ・スクールがスタートし4年目となる。こども園の課題解決に向けて、熟議、協働を重ねている。

会長：湯浅 正行 副会長：藤本 亮恵

委員氏名	所属(役職等)
河 口 龍 裕	和木小学校(校長)
亀 谷 秀 雄	和木中学校(校長)
渡 邊 真 奈 美	町保健相談センター(所長)
竹 本 講 治	和木町民生委員・児童委員協議会(会長)
岸 本 徳 久	和木こども園PTA(会長)
藤 本 亮 恵	町婦人会(会長)
崎 本 み どり	主任児童委員・第3者委員
湯 浅 正 行	町社会福祉協議会理事
中 磯 和 子	町母子保健推進協議会代表

（3）運営協議会

① 第1回 運営協議会

日 時 令和5年6月7日（水）

10：00～11：30

場 所 和木こども園 こども広場

内 容 3～5月のこども園の取組状況の紹介、園教育基本方針の承認
幼保小の架け橋プログラム事業について

② 第2回 運営協議会

日 時 令和5年12月8日（金）10：00～11：30

場 所 和木こども園 こども広場

内 容 2学期の取組状況について、園評価
町園小中連携の進捗状況について

③ 第3回 運営協議会

日 時 令和6年3月上旬実施予定

場 所 和木こども園 こども広場

内 容 園評価の報告、今年度の成果と課題

8 今年度の成果と課題

架け橋期のカリキュラムの有効的な活用を念頭に、0歳児～5歳児までの全学年が年間指導計画を下に教育・保育活動を行った。今後は園内研修で見直された指導計画と、架け橋期のカリキュラムが相互的により良いものとなるようブラッシュアップしていきたい。

5 和 木 小 学 校

1 学校教育目標・学校経営方針

令和5年度 和木小学校の教育

＜山口県教育委員会教育目標＞
未来を拓くたくましい「やまぐちっ子」の育成

＜和木町教育委員会教育目標＞
ふるさと和木に誇りと愛着を持ち、和木の将来を担う人づくり

【学校教育目標】
夢と希望に満ちあふれ、ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生きる和木っ子の育成
校訓 「道を行うに誠実をもってせよ」（何事も本気でまじめにやれ）

めざす学校像

- ◇みんなに愛される学校
- ◇明るく美しい学校
- ◇温かく楽しい学校

めざす児童像

- ◇**学び合う子**
確かな学力を身に付け、目標に向かって努力する子
- ◇**はげまし合う子**
他人へのやさしさや思いやりのある心豊かな子
- ◇**進んで行動する子**
自ら気づき、考え、最後までやりとげる子

めざす教職員像

- ◇信頼される教職員
- ◇組織で実践できる教職員
- ◇成長し続ける教職員

＜学校経営方針＞

- (1) 尊師親愛生の精神と校訓「道を行うに誠実をもってせよ」を基調とした学校づくりを進める。
- (2) 知徳体の調和のとれた「生きる力」を育成する。
- (3) 「ユニバーサルデザイン」を基盤にして、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの実現をめざした授業を創造する。
- (4) 組織力を生かし、共通理解と共通実践を大切にして、「チーム和木小」をめざす。
- (5) 園・中や家庭・地域等との連携を大切にし、和木小らしい教育を推進する。

＜重点取組事項＞

○ICT教育の充実
○学級の安定化と授業改善への取組
○学習力の定着と学力の向上
○読書活動の推進と「いこいの日」の充実
○教科担任制の推進

○人を大切にし互いに認め合う集団づくり
○「いいことばの日」の取組の充実
○三つの約束（時間を守る・学校をきれいにする・あいさつをする）の徹底
○規範意識の醸成

○基本的な生活習慣と体力の向上
○安心・安全な生活への意欲と態度の育成
○気持ちのよい教育環境の整備
○粘り強く頑張りぬく力の育成

表現力

主体性・自主性

応用力

家庭との連携

地域との連携

園・小・中一貫教育の推進

コミュニティ・スクール

地域協育ネット

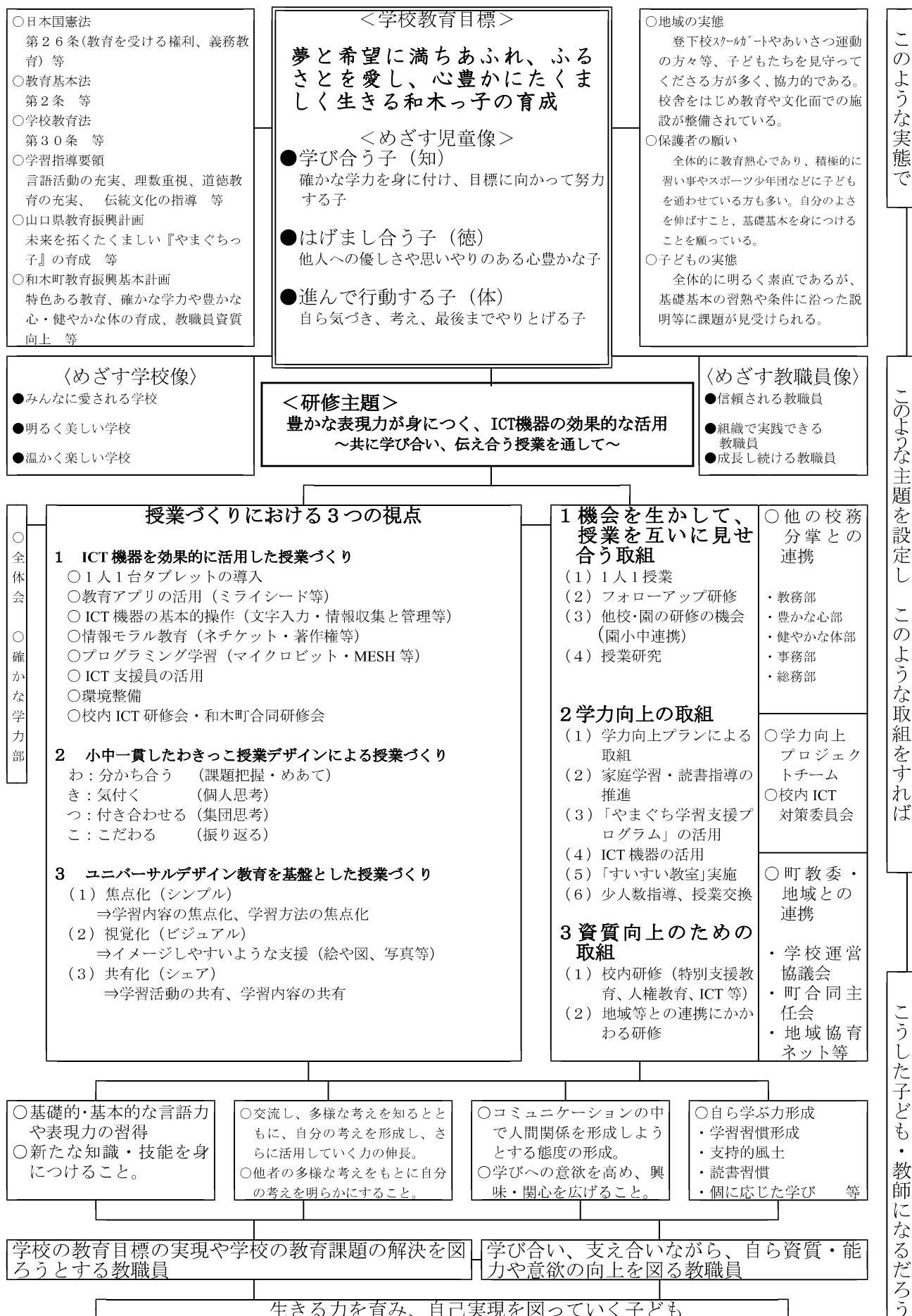
和木学園

2 本年度の取組
(1) 確かな学力部
① 研修計画

令和5年度

校内研修全体計画

和木町立和木小学校



② ICT 機器を活用した効果的な指導方法の工夫・改善

ア 授業研究

全体研修として3名の教員が研究授業を行った。講師に、中村学園大学教授山本朋弘氏、岡山大学教授佐藤暁氏、岩国市立東小学校校長大庭紀之氏を招き、子どもの学びの見取り方や教科指導、ICT 機器の効果的な活用について指導助言をいただいた。年々ICT 機器の活用の幅が広がり、充実した研修を行うことができている。園小中統一の研修主題の実現に向けて、引き続き研修に取り組んでいく。

イ 夏季校内研修

夏季校内研修では、人権教育、道徳教育、特別支援教育、全学調分析、各種復伝等の研修に取り組んだ。その中の1つであった ICT 研修では、全職員で CBT 操作による県の確認問題の結果分析や実態把握、復習や事後指導への活用法について共有した。また、本校教員が授業で実践した ICT 機器の活用事例を紹介することで、ICT 機器の活用法について視野を広げることができた。

ウ タブレット端末の持ち帰りに向けて

今年度12月に、全学年でタブレット端末の持ち帰りを実施した。事前指導として、各クラスで持ち帰りのルールを丁寧に確かめたり、内容を「おうちで運動の撮影」とし、インターネットに接続せずに取り組めるように設定したりしたことで、トラブルなく実施できた。タブレット端末を活用した家庭学習の更なる充実に向け、今後も継続していきたいと考えている。

エ 課題

タブレット端末の児童の取り扱いについて、校内のルールを守れなかったり、破損や故障につながる使い方をしたりすることが少なくない。また、タブレット端末の持ち帰りについては、各家庭のインターネット環境等を把握できていないことから、実施できる内容が限定されている。児童の学力向上に向けたツールの一つとして ICT 機器を有効に活用することができるよう、今後も検討を重ねていく必要がある。



R5. 6. 23 町 ICT 合同研修会
5 年生図工の授業風景



R5. 8. 23 夏季校内研修
I C T 研修実践事例紹介



R5. 12 「おうちで運動」を撮影
した画像を担任に提出したもの



R5. 11 全体研修（3 年生理科）
後の研究協議会（学校運営協議
会の委員さんも交えて）

③ 学力向上の取組と課題

ア 朝学タイム・やまぐちっ子タイム

朝学タイムでは、15 分間の学習時間を設け、国語や算数の基礎学力定着に努めた。やまぐちっ子タイムでは、全校体制でやまぐちっ子プリントを活用し、既習事項の確認や条件作文に取り組んだ。今後、専用の棚を準備し、使いたいときにすぐ取り出して使える環境を整備していきたい。

イ 和木学園勉強週間

和木中学校のテスト週間に合わせて勉強週間を設けた。家庭での読書習慣とメディア・コントロール力向上もめざしたが、家庭ごとの取組に差が見受けられた。また、取組がお手伝いや読書のみの児童が多く見られることから、学年に応じて自主学習を行ったり、学習時間を設定したりと、普段より家庭学習が充実した 1 週間になるように声かけを行っていききたい。

ウ 学力向上プラン

各学年、教科ごとに学力向上プランを作成した。全国学力・学習状況調査や山口県学力定着状況確認問題の結果を基にして、課題解決に向けた具体的な取組を考え、日々の授業改善に役立てた。夏休みの校内研修では、前期の振り返りを行い、1 学期の反省を基に 2 学期以降の取組を各学年で話し合うことができた。

④ 読書活動の推進

ア 図書委員会の活動

(ア) おすすめの本の紹介

おすすめの本を紹介するカードを書き、図書室に掲示した。季節ごとにカードを貼り替え、おすすめの本の置き方も工夫した。

(イ) 読書ビンゴ

様々なジャンルの本を読むことを目的に、図書委員会の児童がビンゴカードの台紙の内容を考え、実施した。低学年用、中学年用、高学年用にそれぞれ 2 種類作成し、ビンゴを達成した際には、図書委員会の児童が作成した菓をプレゼントした。



イ 選書会

本年度はカタログから教職員が選書した本を用いて、選書会を行った。児童は本を実際に手に取り、内容を確認して気に入った本に投票した。

ウ 「いこいの日」ノーテレビ・ノーゲームで親子読書

毎月 15 日の「いこいの日」に、ノーテレビ・ノーゲームで親子読書に取り組む活動を行い、「いこいカード」で振り返りを行っている。

エ 地域との連携

「ゆびとまの会」の方々の読み聞かせを各教室で行った。児童は自分の席に着き、読み聞かせのお話を聞いた。お話や手遊びなど、様々な活動を行っていただいたことで、児童が楽しんでいる姿がよく見られた。

オ 成果と課題

貸出冊数が増加しており、学校図書館の「読書センター」としての機能を果たしている。しかし、貸し出される本の種類には偏りが見られる。また、傷んでいる本がよく見られるようになってきているため、本の扱い方についての指導を改めて行っていきたい。

(2) 豊かな心部

① 心のアンケート、にこちゃんアンケート、いじめ対策

ア 目的

いじめ防止の取組として、児童が抱える様々な不安や問題を解決するとともに、問題を早期に発見し生徒指導に生かすために実施する。

イ 内容

毎週火曜日（できない場合は同じ週の金曜日まで）に「にこちゃんアンケート」を実施する。「いやな思いをしている」「相談したいことがある」と記入した児童については、担任がすぐに対応し（対応した結果を記入）、早急に対応すべき事態があった場合は、学年で情報交換した後、必ず生徒指導主任や管理職に報告し、関係する職員で臨時の会をもつようにしている。

ウ 成果と課題

児童が抱える様々な不安や問題を早期に発見するために、担任や生徒指導主任とで連携しながら進めてきている。また、年に2回、「心のアンケート」を実施し、児童一人ひとりと担任が面談を行うことで、学校や家庭での児童の悩み等を把握し、児童へのきめ細かな指導に活用することができた。児童との信頼関係を築き、安心して担任に思いを伝えられる環境づくりにより一層努めていく必要があると考える。

質問	回答	先生への記入欄
1. 何か心配事がありますか。	はい いいえ	（ ）
2. 友達と仲良くあそびたいですか。	はい いいえ	（ ）
3. 何か趣味がありますか。	はい いいえ	（ ）
4. 何か目標がありますか。	はい いいえ	（ ）
5. 何か夢がありますか。	はい いいえ	（ ）
6. 何か怖さがありますか。	はい いいえ	（ ）
7. 何か秘密がありますか。	はい いいえ	（ ）
8. 何か秘密がありますか。	はい いいえ	（ ）
9. 何か秘密がありますか。	はい いいえ	（ ）

② 生活指導

ア 校内生活の指導

(ア) 目的

学校生活で児童一人ひとりが決まりを守り、他者を思いやりながら過ごす集団生活の基盤をつくることができる。

(イ) 内容

生活委員会を中心に、各学年のトイレのスリッパがそろっているかチェックを行い、結果を給食中の放送で全校に知らせる。廊下や階段に右側通行を意識できる掲示を設置し、児童に右側通行を意識させる。

(ウ) 成果と課題

トイレのスリッパについて、児童は毎週関心をもって放送を聞いており、日頃からスリッパをそろえることに対する意識を高めていることにつながっていると感じられる。右側歩行に関しては、本校の廊下・階段には中央線がなく、児童も右側歩行を意識する機会がなく歩行していたが、この掲示を設置してからは、意識して右側を歩こうとする様子が多く見られるようになった。しかし、まだ意識が低い児童も見られるため、今後も継続して取り組むとともに、また別の取組も今後考えていかなければならないと感じる。

イ 校外生活の指導

(ア) 目的

校外で安全に気をつけながら、決まりを守って過ごす基盤を育む。

(イ) 内容

交通安全や地域の過ごし方について、児童に日頃から呼びかけるとともに、気になる児童の様子が見られた際には、全校放送などで注意喚起を行った。

(ウ) 成果と課題

地域の方からも情報提供をいただくことがあり、地域と連携しながら校外生活の指導について対応している。生徒指導主任を中心に教職員全員で連携して今後も児童の指導に当たっていきたい。

③ あいさつ運動

ア 内容

今年度も前年度に引き続き、学校の正門前で生活委員会が毎週火曜日と木曜日にあいさつ運動を行った。生活委員の児童が、あいさつ標語のぼり旗を持ってあいさつをすることで、今まで以上に「あいさつ運動」のアピールをし、活動の活性化を図った。

また、地域の民生委員・児童委員や、家庭教育支援チーム「はっちーず」の方々にも活動に定期的に参加していただき、地域ぐるみで「あいさつ運動」を行うことができた。



生活委員会のあいさつ運動の様子

イ 成果と課題

昨年度から継続して正門前であいさつ運動を行うことで、子どもたちが朝から大きな声であいさつをすることがだんだん定着してきたように感じる。まだ個々であいさつの声の大きさに差があることが課題であり、引き続き呼び掛けていくことが大切である。

また、地域のいろいろな方が活動に参加してくださったことで、子どもたちが学校の中だけでなく、地域であいさつを積極的に行うことにつながるのではないかと思います。



地域の方の参加の様子

④ 人権教育の推進

ア いいことばの日

(ア) 目的

生活の中で児童が言葉を大切にすることの意識をもち、言葉遣いや行動に気を付けることで、相手も自分も大切にすることの気持ちと態度を育てる。

(イ) 内容

毎月11日を「いいことばの日」として、言葉遣いに気を付けたり、家庭や地域で「いいことば」を遣ったりすることをその日の重点指導や振り返りとする。

(ウ) 成果と課題

「いいことばの木」の掲示を、1年間かけて全校児童の言葉が掲示できるようにし、意識付けを行った。「いいことばの日」の前後には、各学級で最近の「いいことば」について、学校・家庭・地域で遣ったり言ってもらえたりしたことについて話し合う活動を設けている。「いいことばの日」があることで、言葉遣いを見直し、相手も自分も大切にしようという気持ちを高めることができた。しかし、日常的に「いいことば」を意識して生活することが難しいという課題が毎週行われる「にこちゃんアンケート」によってあげられている。児童が日常生活の中で「いいことば」を遣おうとする意識をもつため、継続的に意識付けが行えるように更なる工夫が必要だと考える。

イ 豊かな心を育む人権参観日（11月18日）

(ア) 目的

人権教育に関する授業公開を通して、児童や保護者の人権尊重の意識を高め、一人ひとりを大切にすることの教育を組織的・計画的に推進する。

(イ) 内容

人権教育にかかわる内容（心の教育、いじめについて等）を行う。

(ウ) 成果と課題

児童一人ひとりが友達や周りの人について考えることで、自分の言葉や態度に気を付けようとする意識を高めるとともに、学校の取組を見ていただくことで、家庭・地域・学校がともに児童の人権感覚を養っていききたいという意見が見られた。

(3) 健やかな体部

① 体力向上の推進

ア 本校児童の体力について

今年度実施した体力テストの結果から、20mシャトルランの記録は他の種目と比べて全国平均を上回っている学年が多かった。しかし、その他の種目においては、全国平均を下回っている学年が多い傾向が見られた。特に握力や柔軟性、投力については、男女ともに全国平均より低い学年が多く、改善する必要があると感じた。



イ 体力向上に向けた取組

(ア) おうちで運動

柔軟性を上げる運動を2つと、月替わりで行う運動を1つの計3つを毎日行っている。また、運動習慣をつけるポイントとして、保護者と協力しながら行える運動も取り入れるようにした。

(イ) 和木小スポチャレ！

毎週火・木・金曜日の掃除前の時間を使って短い時間でできる運動を行った。体力テストの結果から曜日ごとに柔軟性や握力、投力向上のためのストレッチを行い、体力向上や運動習慣づくりにつながるよう取組を行った。



(ウ) 的当てチャレンジ

昨年度に引き続き、スポーツ委員会を中心として昼休みに的当てチャレンジを行った。的に命中するように、投げる角度を考えたり、何度も挑戦したりする児童が見られた。

② 食育の推進

ア 栄養教諭との連携による食育授業の取組

1年	おはしの正しい持ち方を知ろう
2年	野菜となかよくなろう
3年	食べ物の働きを知ろう
4年	すごいぞ大豆の力
5年	だしについて知ろう
6年	5大栄養素を知り、バランスの良い食事をとろう

イ 成果

1年 栄養教諭から箸の正しい持ち方や使い方のマナーを教わった。食育指導を受けて、箸の持ち方を意識する児童が増えた一方で、学校の給食時間だけでは矯正は難しい児童も見られ、家庭との連携が必要だと感じられた。



3年 食べ物の3つの働きや、給食に赤・黄・緑の食べ物が入っていることを学んだ。バランスよく食べようと意識し、作る方の思いを考える姿が見られた。

5年 家庭科での味噌汁とご飯の調理実習前に、栄養教諭に出汁について詳しく教わった。色々な食材から出汁がとれることに気付いたり、給食の献立に使われる出汁に興味を示したりしていた。

来年度も食育を通して望ましい食事の取り方について理解を深めさせたい。

③ 健康・安全教育の推進

ア 学校保健に関する活動状況について

(ア) 生活習慣

「生活習慣アンケート」結果から、朝の目覚めが「いつもすっきり」、「だいたいすっきり」が約59%と低い。睡眠との関連が大きい電子メディア使用との関係を見ると、

㊦ 電子メディアを寝る前1時間以内に「いつも使う」、「使う日が多い」が約72%と高い

㊧ 自分のスマホがある児童が4年生以上では56%と半数を超えている

㊨ 休日になると電子メディア使用時間3時間以上が約43%と平日より約28%高い

使用時間の決まりを「守れていない」児童の約72%は、親が決まりを決めていることから、親子で話し合い、決まりをつくることで、使用方法や時間が改善すると考えられる。

今後、保健便りを通して、電子メディアの使用方法について発信していく。

(イ) 学校安全保健委員会

年2回実施した。第1回では、低学年の児童と保護者を対象にコロナ禍後初めて講演を行った。今回のテーマは「眠育」で、講演後、保護者と教職員の情報交換の場を設け、家庭での困り感や改善の試みなどを共有した。「電子メディアの使用時間は意識していたが寝る前の使用は意識していなかった」、「子どもは、一緒に布団に行かないと寝ない」、「生活を朝型にすると子どもが比較的スムーズに起床することができた」などの意見があった。参加者が少なかったため、保健便りを通して情報発信した。



イ 健康・安全教育の推進

(ア) 保健教育

㊦ 保健の掲示物は、時節や健康課題に合った内容で、児童が直接触って動かしたり、イメージしたり、自分の生活を見直せるものを掲示している。

㊧ 身体測定時に、養護教諭が心身の健康について指導を行った。2学期には、よい姿勢のよさや座り方の確認をし、校内巡視時に声かけを行っている。指導を通して、自分の生活について振り返り、見直す機会となるよう今後も働きかけていく。



(4) 地域連携

① 地域とのかかわり

新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、基本的な感染症対策を徹底した上で、徐々にではあるが実施できる活動を増やしながらコミュニティ・スクール機能の充実をめざした。

ア 学校運営

本年度も「学校を開き、学校の課題解決に地域と一緒に取り組む」ことを念頭に、より中身の濃い協議会運営をめざした。本校の課題である「学力向上」や「地域に開かれた学校づくり」などについて、教育活動アンケートの結果や学力・学習状況調査の資料をそろえて委員の方々と熟議ができた。また、来年度、本校が開校150周年を迎えるため、その記念行事として行うイベント内容を考える熟議では、5年生児童と委員の方々がグループをつくり協議を行った。委員の方々から、様々な意見や助言等もいただき児童たちとの熟議は大変充実したものとなった。

イ 学校支援

地域住民の学習協力や活動のサポートとして「芋作り」(1年)、「レッツゴー町たんけん」(2年)、「手話」「車いす・老人体験」(3年)、「水辺の教室」(4年)、「稲作」「人権教室」(5年)、「和木町の未来について考えよう」(6年)等の学習で地域の方々に直接指導していただいたり、活動のサポートをしていただいたりすることで、豊かな学習活動が展開できた。また、4～6年生対象にタイピング教室を行い、地域の方を講師としてお招きした。

6年生の「わき愛あいフェスティバルでの物品販売」では、融資を受け、商品を仕入れ接客し、販売する出店体験等を行った。講師に和木町商工会議所の方々を迎えて、“ものを売る”ということについて具体的にご指導いただいた。



ウ 地域貢献

地域行事への参加では、上述した6年生の「わき愛フェスティバルでの物品販売」や4年生が参加した「WAKI コンサート」が挙げられる。6年生には、地域の行事にスタッフとして参加することで、和木町のよさを実感し、ふるさとを愛する意識を育むことをねらいに学習した。地域を支える人材育成、地域の活性化の一助となる活動になったと考える。地域と連携した教育活動が、上記のような教育的効果へとつながるように、コミュニティ・スクールの取組の更なる充実をめざすとともに、地域に開かれた教育課程の開発と、地域の拠り所となる学校づくりに、邁進していきたい。

③ 園小交流、小中交流

園小交流では、11月と1月に年長児と1年生のふれあい交流、11月に年長児と2年生の交流（おもちゃまつり招待）を実施した。年長児は小学校への期待感をもち、1・2年生は自らの成長に対する充実感を感じることができた。小中交流では、1月に6年生が中学校で部活見学や体験授業（数学科・英語科）をしたことで、進学による生活面・学習面の大きな変化に伴う不安感が軽減され、円滑な接続に向けた準備ができたように思う。

園小、小中それぞれに、担当教員同士の連携において、時間の確保が難しいことが課題である。情報交換や共有、情報の蓄積方法等課題はあるが、今後も園小、小中間の連携を密にし、積極的に時間を確保しながら園小中連携を充実させていきたい。



R5.11 年長児と1年生の
ふれあい交流会



R5.11 年長児を招待した
2年生のおもちゃ祭り

3 本年度の成果と課題

本年度は、地域連携カリキュラムをもとにした外部講師による学校支援を取り入れた活動を数多く展開することができた。地域や保護者の方々に見守りをしていただいた町たんけん、地域の支援団体の方々の協力を得たあいさつ運動、パソコン教室の講師の方のタイピング教室などの学校支援により、児童への支援とともに学校の様子を外部の方に知っていただくことができた。また、和木町や姉妹都市の恵庭市のよさを発信したわき愛あいフェスティバルへの出店、お年寄りに届けるお弁当に添えるメッセージの作成など、地域へ貢献する機会も増え、ふるさとへの愛着が増したのではないだろうか。さらには、来年度の開校150周年に向けて児童と学校運営協議会の委員の方でどんなことができるかを熟議し、一緒に学校運営を展開していく第一歩が踏み出せたことは大きい。今後は、コロナ後の社会変化も考えながら、持続可能な地域連携の在り方を考えたい。

園小中連携については、主に低学年と年長の交流を充実させた。小中連携については、児童が実際に和木中学校を訪問し、授業体験や部活見学をすることができた。また、ICT教育については、本校では、タブレット端末を授業等で個別最適な学びや協働的な学びに生かすため、どんな学習場面でどのような方法で取り入れると効果的かについて研究を重ねた。タブレット端末の持ち帰りの拡充を視野に、情報モラルについて規範意識の高い児童を育てていきたい。

これからも、チーム和木小・チーム和木町で和木っ子たちの健やかな成長の支援を行いたい。

6 和 木 中 学 校

1 学校教育目標

山口県教育目標 「未来を拓く たくましい『やまぐちっ子』の育成」

和木町教育委員会

「町ぐるみ『和木学園』」

和木町教育目標 「ふるさと和木に誇りと愛着をもち 和木の将来を担う人づくり」

和木中学校

【学校教育目標】

「ふるさと和木を愛し 夢と志をもって 力強く生きていく生徒の育成」

【校訓】 英知（確かな学力） 愛情（豊かな情操） 勇気（たくましい実践）

【めざす学校像】

- 学びたいと思える学校（生 徒）
- 通わせたいと思える学校（保護者）
- 勤めたいと思える学校（教職員）
- 応援したいと思える学校（地 域）

【めざす生徒像】

- 自ら意欲的に学ぶ生徒
- 思いやりのある生徒
- 進んで実践する生徒

【めざす教師像】

- 学び続ける教師
- 生徒の心がわかり可能性を信じる教師
- 信頼関係を築く教師

【チャレンジ目標】 『 時を守り 場を清め 礼を正す 』

「凜とした雰囲気のある学校」 「よりよい社会人としての資質・能力の育成」

【生徒会目標】 「 P l u s U l t r a ! ～ともに高みへ～」

2 学校経営方針

- (1) 教科教室やICT機器等の恵まれた学習環境を有効活用した指導方法の工夫・改善と確かな学力の定着
- (2) 豊かな人間関係を築き、夢と志をもち、自己実現に向けて主体的に活動する生徒の育成
- (3) やまぐち型地域連携教育の推進による、地域とともにある学校づくり
- (4) 「町ぐるみ『和木学園』」の中での、園小中一貫教育の推進
- (5) 教職員の業務改善による働き方改革の推進

3 本年度の重点目標

- (1) 教育課程・学習指導
 - ① 生徒の主体的な取組を生かした授業づくり
 - ② 学習規律を大切にし、落ち着いて授業に取り組むことのできる生徒の育成
 - ③ 家庭学習の習慣化
- (2) 生徒指導・教育相談
 - ① 一人ひとりの生徒に寄り添った円滑な人間関係の構築
 - ② 生徒が安心して安全に生活できる学校づくり
 - ③ 凡事徹底の実践と学校行事を通した豊かな心の育成
- (3) 家庭・地域との連携
 - ① 保護者参加を増やすための学校行事の啓発
 - ② やまぐち型地域連携教育の推進による生徒の地域行事への参加
 - ③ 進んであいさつのできる生徒の育成
- (4) 人材育成・業務改善
 - ① 自己目標をもとにした授業力、生徒指導力、業務遂行力の向上
 - ② 学習指導や生徒指導、業務の組織的な取組でのチームによる人材育成の推進
 - ③ 業務改善等による時間外勤務時間の短縮への意識の向上

4 本年度の努力点

- (1) 確かな学力の定着
 - ① ICT 機器を活用した授業改善
 - ② わきっこスタンダードの実践
 - ③ 学び合い(主体的・対話的で深い学び)のある授業実践
 - ④ 授業のめあてと振り返りによる内容を見通した学習
 - ⑤ 「家庭学習の手引き」を通した家庭との連携

(2) 豊かな心の育成

- ① 教育活動の中での生徒の価値付け
- ② 生徒会を中心とした、生徒の活躍の場の設定
- ③ 生徒の健全育成のための家庭との連携
- ④ 「労作活動」への積極的な参加
- ⑤ 諸行事でのボランティア活動の奨励
- ⑥ 意志力、情操力、想像力を育む心磨き清掃の徹底

(3) 家庭・地域との連携

- ① 学校評価アンケートの実施
- ② 生徒会活動を通じた地域行事参加の啓発
- ③ 学校だよりやホームページによる学校行事の啓発
- ④ あいさつを通じた尊師親愛生の精神の醸成
- ⑤ 各種ボランティア参加の啓発

(4) 人材育成・業務改善に向けて

- ① 教員同士での授業参観
- ② 生徒指導上の諸問題のチームでの対応
- ③ 業務遂行での教職員の協働
- ④ ライフワークバランスのための職員会議後の勤務時間終了時の閉庁
- ⑤ 電子カードによる月ごとの時間外勤務時間の把握

5 研修

(1) 研修主題

「豊かな表現力が身につく、ICT 機器の効果的な活用 ～『学び合い』を通して、他者を意識し、考えを伝え合う～」

(2) 研修内容

① 授業力向上(一人一授業)研修

今年度は、初任者研修の参観授業を中心に、一人一授業の日程を決定した。授業者と授業日を事前に決定し、周知することで計画的に研修に取り組める体制を整えた。また、研修主題をより意識した授業づくりを行うために、以下の2つの取組を実施した。

ア 「豊かな表現力」の共有

年度初めの職員会議において、各教科の「表現力」において、特に「育成したい力」を具体的にすることを周知し、各教科で設定した。各教科における目標を明確にすることで、授業づくりの軸を定め、教科担任間の連携が図れると考えた。なお、各教科が定

めた「育成したい力」は以下のとおりである。

国語：自分の思いを相手に正しく伝える力
数学：数理的にものごとを見たり考えたりして根拠を伝える力
社会：多面的・多角的な思考を踏まえ、それらを整理する力
理科：科学的に探究し、より具体的に伝える力
英語：自分の考えや思いを積極的に伝えるコミュニケーション能力
音楽：音楽のよさや特質を感じ取り、自分の考えを加えて思考・判断・表現する力
美術：造形的なよさや美しさを感じ取り、思いを表現する力
保体：互いに技能や能力を高め合うコミュニケーション能力
技術家庭：互いにかかわり合い、協力し合う力
道徳：異なる立場や視点からの意見を踏まえて、自分の考えを述べる力

イ 板書型指導案の統一

参観者が、授業の中で「表現力」、「ICT」がどの場面と関連しているかが分かるよう、指導案の書き方を統一した。授業者は、研修主題を意識した授業づくりができ、参観者は授業評価の視点を絞ることができるため、質の高い研修につながると考えた。

② 学力向上プランの充実と活用

上記に示した、「育成したい力」を伸ばすための具体的な取組を各教科で設定し、上記①の研修と一貫性をもたせるようにした。学力向上プランの見直しは、研修主題の取組の見直しにつながるため、より学力向上プランが効果的に活用できると考えた。

③ 和木町 ICT 研修、学び合い研修

7月上旬に、岡山大学大学院教育学研究科の佐藤暁教授を講師に招き、学び合い研修を実施した。また、12月上旬に、中村学園大学教育学部の山本朋弘教授を講師に招き、和木町 ICT 教育合同研修会を実施した。

④ 全国学力・学習状況調査および学力定着状況確認問題の結果分析

ア 全国学力・学習状況調査の結果分析

6月下旬の研修職員会にて、職員を「国語」「数学」「英語」の3つのグループに分け、各グループで分析を行った。正答率が高い問題と低い問題を抜粋し、実際に教員も解くことで、生徒が身に付けるべき力を考えやすいようにした。分析の結果、簡単な知識を問われる問題は正答率が高いが、複数の資料から必要な情報を読み取る力や、情報を整理して考える力、問われたことに対して自分の考えを正しく表現する力が問われる問題は正答率が低い傾向があり、授業でこれらの力を育てる必要性が見えた。また、生徒質問紙は研修主任が分析し、「自分には、よいところがある」という生徒の割合が全国平均

を上回り、「毎日、同じくらいの時刻に起きている」と思う生徒の割合が全国平均を下回った。

イ 学力定着状況確認問題の結果分析

4月に実施された「山口県確認問題」の結果について、8月下旬の研修職員会で職員を「国語」「数学」「英語」の3つのグループに分け、各グループで分析を行った。また、10月に実施された山口県学力定着状況確認問題の結果について、分析を各教科の担当教員が行い、12月上旬の職員会議で共有した。分析の結果、両調査ともに、各教科の正答率は県平均と同等か下回る結果となり、考え方を記述する問題は正答率が低い傾向があった。また、基本的知識を問われた問題で県平均を下回るものもあった。説明する力や、前学年の既習事項の知識が十分に定着できていないことが、正答率に影響していると考えられたため、授業中での学び合い活動や、前学年の振り返り等を行いながら授業改善を図っていく。また、また、生徒質問紙は研修主任が分析し、「地域の行事に参加している」と思う生徒の割合が県平均を上回り、「数学の勉強が好き」な生徒の割合が県平均を下回った。

(3) 成果と課題

① 成果

各種研修を通して、全職員が授業について考え、改善に生かすことができた。また、年度初めに各教科の「豊かな表現力」を具体的にしたこと、生徒の成長を評価する視点が明確になった。各種研修の教員の振り返り活動にICTを活用し、ICTの積極的活用を啓発することにつながった。

② 課題

一人一授業の公開について、参観者が少ない授業もあった。教員が振り返るためのプリントを用意する等して、積極的な参観を促したい。また、各種学力調査の分析についても、授業にどのように反映させたかを、共有できる体制を整えることで、生徒の確かな学力の定着を図っていく。

6 朝学習

昨年度から継続し、毎朝8:10～8:20までの10分間に朝学習の時間を設定した。

(1) 目的

1人1台端末を活用し、生徒の基礎的・基本的学力の定着を図るため。

(2) 内容

毎週金曜日の朝学習時に、次週の各教科の学習内容について目標を立て、生徒は計画的

にオクリンクの「ドリルパーク」に取り組む。

(3) 成果と課題

学力低位の生徒も、集中して取り組んだ。また、小学校の内容にも取り組めるため、理解できていなかった内容が理解できた。曜日ごとに教科を指定することで、どの教科もバランス良く取り組むことができるよう努めた。また、毎週金曜日に振り返りの時間を設け、次週に取り組む内容を各自が考え、振り返りシートに記入できるようにした。

7 読書活動

給食準備の時間(まどいの時間)の8分間に毎日読書活動をしている。朝の読書の時間は朝学習を行うため、全校で取り組む読書の時間はこの時間だけとなっている。図書室の開館は昼休みのみであり、家庭でもスマートフォンの普及などにより、生徒の読書の時間は確実に減ってきている。読書をすることで、語彙力や想像力が身に付くことが期待されるので、図書委員会を中心に生徒の読書活動を推進する取組を行った。「図書ビンゴ」と題して、九マスに異なるジャンルの本を書いたビンゴの用紙を図書委員会で作成した。生徒が図書室に訪れたり、いつも読まないジャンルの本に触れたりする機会となるようにした。また、生徒や教員におすすめの本の紹介文を書いてもらい学年毎に掲示した。掲示を見ながら、よく取り上げられている本や面白そうな本について、話し合っている姿も見られ、読書活動の推進につながった。他にも、図書委員会の生徒が中心となって、「図書委員会だより」を発刊した。図書室に訪れ本を手にとったり、本に興味をもってもらったりするきっかけづくりのために、新刊情報や3年生の図書委員のおすすめの本を掲載し、全校生徒に配付した。今後も、生徒の読書活動が活発になるような取組を考えていきたい。

8 通級指導教室

(1) 目的

通常の学級に在籍する障害のある生徒について、自立をめざし、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養う指導を個別で行う。

(2) 生徒の実態

言語障害、自閉症、情緒障害、LD、ADHD

(3) 指導の実際

① 認知機能強化トレーニング

(コグトレ＝聞く、書く、読む、話す、計算する、推論する)

② ビジョントレーニング (お手玉、けん玉)



- ③ ソーシャルスキルトレーニング
 - ④ パズル（ポリックス）
 - ⑤ カードゲーム（トランプ、四字熟語、あいうえおレース）
 - ⑥ 体幹トレーニング（バランスボール）
 - ⑦ 指導者との対話
- （４） 成果と課題

落ち着いた環境で課題に集中することができ、それを認められることで、自己肯定感を高め、通常の学級での学習にも落ち着いて取り組めるようになっている。また、日常的に自分の言動を振り返ることで、怒りを自分でコントロールすることや言葉で思いを伝えることを意識した生活が少しずつできるようになっている。これからは、小中連携も視野に入れつつ、生徒それぞれの困難さや心情に寄り添い、保護者及び担任・教科担任と連携し、適切な指導や支援を続けていきたい。

９ 生徒会活動

６月８日（木）の５・６校時に実施した生徒総会では、１人１台端末を効果的に活用することで、活発な話し合いの場となった。前年度の３月に旧１・２年生にTeamsでアンケートを行い、予め生徒が話し合いたい議題を募った。そして、本番前にミニ生徒総会をクラス単位で行った。議題について考える際は、一人ひとりが記入したプリントを撮影させ、生徒総会当日に学校用タブレットを持参するようにした。生徒総会では、撮影したプリントをもとに話し合いを進めた。また、しおりもデジタルでタブレット端末にダウンロードしたり、プロジェクターで議事録を反映させたりする等、ICTを効果的に活用できた。

１０ 文化祭

（１） 文化祭の実施方法

新型コロナウイルスが５類に引き下げられたことで、感染症対策として昨年度まで各教室で行われていたオープニングを、体育館に全校生徒を集めて行う等、コロナ禍前の形で実施した。

（２） 文化祭の内容

午前の部として、オープニングから合唱コンクール、英語暗唱、自主企画、吹奏楽コンサートを体育館で実施した。午後の部では、各教科、部活動、総合的な学習の時間で制作した展示や全校制作のモザイクアートを学年毎に見学した。その後、全校生徒とPTA有志による生徒会企画「逃走中」をグラウンドで実施した。エンディングは、多目的スペースで合唱コンクールの結果発表等を行った。全校生徒が集まり、感動を全員で共有できた。

文化祭となった。

(3) 文化祭での取組

生徒会スローガン「**Plus Ultra** ～ともに高みへ～」のもと、夏休みからオープニングとエンディング、生徒会企画の準備を行った。生徒が主体となってストーリーを考え、夏休みから撮影や道具の準備を行った。生徒会企画では、生徒が0からルールを考え、何度も会議を重ね試行錯誤した。その後、PTA役員を交えた会議を行い、生徒が自分たちで決めたルールをPTA役員に説明する場を設け、意見交換をすることで、よりよい企画を考えることができた。全校生徒とPTA有志による大規模な生徒会企画の準備や当日の運営を通して、自分たちでつくり上げる充実感や達成感を得ることができた。

11 体験活動

(1) 宿泊研修

5月25日（木）・26日（金）に、山口県ふれあいパークにて宿泊研修を行った。晴天にも恵まれ、予定していた研修を順調に行うことができた。最初のレクリエーションでは楽しく活動しながら話し合いや工夫を重ね、全員が協力することの大切さを学ぶことができた。また、ウォークラリーではそれぞれの班で協力しながら予定された時間内にすべての班がゴールインすることができた。野外炊事では、指導員の話をよく聞き、安全に留意しながら調理から片付けまで、それぞれが責任をもってやり遂げることの大切さを学び、また仲間との親睦を図ることができた。2日目は、午前中に陶芸を体験し、各々作品の作成に没頭する姿が見られた。午後は、美しい景色を堪能しながら、みなとオアシスゆうまで徒歩で下山した。宿泊には大部屋を利用し、2日間の研修を予定通り終えることができた。準備段階から意欲的に取り組む生徒が多く、和やかに活動できた。「一人一役」で、各自が役割を確実に果たそうと努力する姿が見られた2日間であった。



(2) 民泊研修

5月25日（木）・26日（金）に、周防大島町にて民泊研修を行った。まず、逗子ヶ浜においてボランティア清掃活動を行った。短時間ではあったが暑い中一生懸命に取り組み、たくさんの廃棄物袋がいっぱいになった。天候に恵まれ、漁業や農産物の収穫作業など周防大島町ならではの貴重な体験を行い、これまで経験したことのない喜びや感動で心身共に満たされ、とても充実した2日間を送ることができた。どの家庭を訪問しても「礼儀正しい生徒たち」「素直で明るい」と言っていたき、生徒たちの生き生きとした表情からも

一生懸命活動した様子がうかがえた。受入家庭が今回の民泊実施に至るまで様々な準備をして迎えてくださっていることに思いを寄せ、今後も学校生活や日常生活における身近な人とのつながりの中で、陰で支えている人々の存在に気付かせ、感謝の心を育てる指導をしていきたい。家族の一員として2日間を過ごす覚悟でスタートした民泊体験だったが、周防大島の方々の心のこもった体験活動やおもてなしにより、お客様気分が完全に抜けるまでにはいかなかったようである。一行事として終わらせるのではなく、マナーや人への思いやりなど、学ぶべきことはきちんと学び、日常生活に根付かせていきたいと思う。事後学習として、タブレット端末を利用し、プレゼンテーションソフトを利用して体験のまとめを行い、体験発表会を実施した。

(3) 修学旅行

5月25日(木)～27日(土)の3日間、関西方面で修学旅行を行った。3年生にとっては中学校生活で初めての宿泊的行事であったが、落ち着いて活動することができた。1日目はUSJでの時間を満喫した。2日目には、京都で班別自主研修を行った。事前に計画をしたルートを班員で協力しながら回することで、仲間同士の絆が深まった。最終日は、奈良で東大寺、薬師寺、法隆寺を訪れた。歴史的建造物や文化財を実際に見ることで、日本の歴史の深さや伝統文化の大切さを再認識する貴重な機会となった。

12 心磨き清掃

(1) 目的

清掃時間を道徳教育の一部と考え、毎日の清掃の時間を行動(活動)の場とし、きれいにするという清掃目的よりも、人間としての成長を主な目的とする。

(2) 五段階の目標

第一段階 我慢する心(意志力)	第二段階 人の気持ちを考える心(情操力)
第三段階 気付きの心(創造力)	第四段階 感謝の心 第五段階 正直な心

(3) 成果と課題

月に一度の振り返りの時間に、生徒が自分の掃除のがんばったところや掃除中の気付きを発表する場を設定した。自分のがんばりだけでなく同じ掃除場所の先輩や後輩のがんばりを共有することで、目標の第三段階の気付きの心の育成の充実を図った。この取組により、余った時間にどこが汚れていて何ができるかを自ら考え、時間いっぱい細かな所まで掃除をする生徒が増えてきている。今後は、より多くの生徒が自発的な清掃ができるように、委員会を中心とした活動を行っていきたい。

1 3 労作活動

(1) 目的

和木中の伝統的な活動で、生徒が主体となって学校内外の清掃活動や奉仕活動を行うことで、自ら環境美化に努める姿勢と愛校心を育む。

(2) 意義

- ① 気持ちよく学校生活を送るための環境を自分たちで整える。
- ② 学校に対する感謝の気持ちを育む。

(3) 成果と課題

今年度から全学年の縦割り班で実施した。清掃場所や清掃内容は各班の労作リーダーが中心となって決め、生徒主体の労作活動を行った。学校をきれいにするために、校舎内の清掃だけでなく、草抜きや駐車場の落ち葉集めなども、生徒自ら考えて行った。また、夏休みの労作活動の一環として、和木こども園の灌水を中学生が行った。今後は労作リーダーだけでなく、多くの生徒がどこをどう掃除するか考え、より主体的な活動になるようにしていきたい。



1 4 人権教育

(1) 人権教室(ゲストティーチャーによる「人権教室」)

各学年別に、人権擁護委員の山本和彦様による「人権教室」を毎年実施している。講話の内容は、一人ひとりの命の重さを軸に、「思いやりの心」「ありがとうの感謝の気持ち」「夢をもち努力を続けることの大切さ」など、学年ごとにテーマが設定されている。



特に、大谷翔平選手や伊調馨選手、三苫薫選手等のアスリートの取組を取り上げ、「最後まで諦めない心」の大切さを紹介した講話は、生徒にとってこれからの生き方の強い支えとなった。

(2) 教員研修および生徒活動

「令和5年度人権教育研修会および講演動画について」を全教員で閲覧し、人権の基本理念やキーワードをもう一度全教員で確認した。人権は誰もがもっている権利なので子どもたちの人権を守る教育をこれからも行っていきたい。

毎月11日「いい言葉の日」の生活委員の活動として、毎月クラスで出た「よい言葉」を集めホールに掲示し、言葉のもつ心の人間関係づくりに取り組んだ。

15 園小中連携

(1) 小学校との連携による SNS トラブル防止に向けた取組

小学校の児童会と中学校の生徒会がタイアップし、それぞれの発達段階に合わせたチェックリストを作成する取組を行った。7月下旬に、小学校が作成した「メディアチェックリスト」をベースに中学校が「SNS トラブル防止チェックリスト」を作成した。今後も生徒会が中心となって全校生徒に啓発を継続的に行っていきたい。

(2) 園児保育実習

3年家庭科の学習で、こども園での保育実習を毎年実施している。目的は「こども園を訪問し、幼児と手作りのおもちゃや絵本を利用して遊ぶ体験を通して、幼児の興味や関心、楽しく安全に遊ばせる工夫や心身の発達について学ぶこと」である。自分の作ったおもちゃや絵本で園児と遊ぶことを通して、幼児への接し方を工夫することの大切さや保育士の苦労ややりがいを感じる生徒が多く見られ、生徒の情操面も育まれた。

(3) こども園運動会のお手伝い

10月に開催されたこども園の運動会では、有志の中学生が準備や片付け、園児の繰り出し等を手伝った。生徒は、園児の様子を垣間見たり、先生方に声をかけていただいたりすることで、活動への意欲を高めるとともに、地域に貢献することの喜びを味わうことができた。

(4) 小学6年生を対象にした授業体験・部活動紹介

授業体験・部活動紹介の目的は、「和木学園構想の理念に則った、校種連携としての小中連携の強化」、「小学6年生の中学校の授業や教科教室での学習体験による、ゆるやかな連携」、「小学6年生の中学校での部活動体験による、中1ギャップ解消と、部活動選択への一助」である。今年度は、コロナ禍前に実施していた形に戻し、中学校で数学科・英語科の授業体験、部活動見学を行った。

16 教育相談

(1) 生活アンケート

毎週月曜日の朝のホームルームで、学校行事等を考慮して「生活アンケート」を実施した。アンケートにスクールカウンセラーとのカウンセリング希望の有無の項目を載せたことで、カウンセリング希望者を把握することができた。

(2) スクールカウンセラーによるカウンセリング

スクールカウンセラーによるカウンセリングの時間を年間56時間確保した。生徒・保護者・教員が教育相談を受けた。教員との教育相談では、教員がスクールカウンセラーから適切で有効なアドバイスを受けた。

(3) 学期末教育相談

事前に、学校や家庭での生活や人間関係等についてのアンケートを実施し、その結果をもとに担任が学期末ごとに生徒との個人面談を行った。教員が生徒一人ひとりを理解し、指導に役立てることができた。

(4) グローイング・ハートプロジェクト

スクールカウンセラーが学年ごとに「SOSの出し方」についての授業を行った。生徒は不安や悩みの本質について知ることができた。

17 キャリア教育

(1) 修学旅行

2日目の宿泊場所に舞妓を招聘し、講話をいただいた。10代で親元を離れ、自分の夢を叶えた講師の話に生徒たちは熱心に引き込まれていた。修学旅行ならではの体験は貴重な経験となった。

(2) 職場体験学習

7月4日（火）・5日（水）の2日間、2年生が和木・岩国・大竹地域で職場体験学習を行った。29の事業所に依頼した。事業所からは、概ねよい評価をいただき、生徒たちがそれぞれの場所で充実した活動をしていたことがうかがえた。生徒たちは学校ではできない、貴重な体験活動を行うことができ、これからの進路選択について考える契機となった。

(3) 職業講話

1月18日（木）に、1年生を対象とした職業講話を実施した。講師は飲食関係者、公務官、地元工場関係者にお願いをした。身近な職業人の話に、生徒たちは熱心に聞き入っていた。

18 道徳教育

(1) 今年度の取組

昨年度に引き続き、ICT機器を効果的に活用した道徳科の授業を展開し、意見の集約や交換、関連性を見える化等の工夫を行った。また、道徳科の授業は学級担任のみが行うのではなく、学年部の教員でローテーションを組み、様々な教員が授業を行うことで、多様な考え方にふれる機会を多くした。

(2) 成果と課題

道徳科の授業においては、多くの生徒は自分の考えを記入・入力することができる。また、仲のよい級友に対しては自分の思いを積極的に相手に伝えることができる。特定

の人間関係にとどまらず、より多くの生徒と交流し、伝え合える人間関係づくりが必要であるとする。また、授業者は生徒と生徒の意見をつなぎ、より深い道徳性のある授業展開を行うことが必要であると感じる。

19 スマイルC運動

本校ではタブレット端末を活用した学習活動が行われている。ICT 機器を使用することは便利である反面、姿勢の悪化や視力の低下、目の疲労など、様々な健康被害をもたらすことが懸念される。令和3年度には、ICT 機器の使用によって疲れた目や体をほぐすために、園小中の子どもたちが内容を考案した「和木 SMILE-C. ストレッチ」が作成された。現在は保健体育委員会が中心となってストレッチの推進を行っているほか、和木町のケーブルテレビジョンである和木チャンネルでも動画を紹介している。

今後は、和木町全体の健康課題を捉え、改善していくための取組を園小中で連携して考案していきたい。

20 食育

(1) 給食指導

給食委員会の活動として、給食前に各学級の配膳台の準備や片付け、給食当番の健康観察を行っている。また、給食終了後は給食搬入室の整備と各学級の残食チェックを行った。年度初めは、残食量が多かったが、一人ひとりに合った量に調節する等、配膳の仕方を工夫したり、その日に完食したメニューごとに花形の画用紙を貼る「完食の木」を掲示したりすることで、全校で残食ゼロの日を増やすことができた。

課題としては、給食準備の時間である「まどい」の時間内に準備を終わらせることである。準備を早く終わらせることで十分な給食時間を確保でき、更なる残食量の削減や、給食を楽しむ時間を確保することができる。委員会を中心に呼びかけ、まどいの時間内に全学級が準備を終えられるよう、取り組んでいきたい。

(2) おむすび弁当の日

園小中の連携の取組として、「おむすび弁当の日」を毎学期実施している。生徒が自分でおむすびをつくるために、具材を決めたり、お米をといだりする等、6つの項目を設定している。生徒は、自分が決めた項目に合わせておむすびづくりに取り組んでいる。この取組を通して、生徒は親の苦勞を知り、感謝の気持ちをもつことができた。また、タブレット端末を持ち帰り、自分がつくっている様子の写真や動画を撮影し、翌日に生徒同士で見せ合うことで、おむすび弁当に対する意欲向上につなげた。課題としては、おむすびを自分でつくることができた生徒は約7割なのに対し、お米を研ぐ等の準備の段階から自分で

取り組んでいる生徒は約3割程度と少ない。おむすび弁当の取組の目的や意義を浸透させ、前回の取組よりも一段階上げた取り組み目標を生徒に立てさせる必要がある。

2 1 部活動

令和5年度より、週末(土・日曜日)の部活動運営を地域移行していくことや生徒のニーズの多様性に対応するために、入部は希望制としている。令和6年度からは、火曜日・木曜日・土曜日のみの活動とする方針を予定している。本校設置部のほかに、地域で活動している団体や習い事等も、社会体育文化部として部活動として位置付けている。また、生徒の主体的な活動を推進し、生徒指導の充実を図るため、本校では二人顧問体制をとっている。部活動における健全な生徒の活動を確保するため、休養日と部活動時間の設定については、国が示した「部活動ガイドライン」に沿って実施している。

2 2 駅伝部

常設部はないため、駅伝部を臨時に設置した。1学期での持久走のタイムをもとに、駅伝選手を選出し打診を行った。併せて、希望する生徒も選手として受け入れた。活動期間は、体育祭終了時から IWAKUNI 絆 EKIDEN (10月29日(日)実施)当日までの1か月半である。活動開始前には医師による健康診断を行い、安全に留意した。令和5年度のメンバーは、男子8名、女子9名であった。練習の様子をみて、練習を手伝いたいと申し出てマネージャーとして参加する生徒も複数名いた。練習は、持久力の向上を意識したものを中心に設定した。また、筋力トレーニングやストレッチも併せて行い、力強く、しなやかな身体づくりとなるよう意識した。大会当日は、開催地岩国市のチーム、他市の有力チームと肩を並べ健闘した。結果は、男子7位、女子は3位入賞した。レース後に「来年も駅伝部で頑張りたい」との意向を示す生徒もあり、駅伝部の活動が今後の生徒の成長に寄与している。

2 3 体育祭

熱中症予防のため午前中のみの実施とし、生徒主体の種目に限定した。全体の種目、学年ごとの種目を交互に設定し、短時間でも充実感が得られるプログラム設定とした。演技学年の保護者のみが観覧できるスペースを確保し、保護者も安心して参観できる配慮を行った。生徒は夏休み中から応援練習を行い、男女合同の全校のダンスを行う準備も並行して行った。「体育祭実行委員会」を立ち上げ、応援団・ダンス隊・生徒会執行部のそれぞれの立場から活動についての情報共有を行い、活動内容を入念に話し合いながら本番までの計画を立て実践した。2学期からの練習では、実行委員会主導で生徒が全体を指導する形で行った。当日は、一生懸命に演技する生徒の表情や笑顔が随所で見られ、充実した体育祭となった。

7 給食センター

1 経営方針

- (1) 和木町立学校給食センターでは、学校給食法(昭和29年法律第160号)の規定に則り、給食を提供するとともに、学校給食管理衛生基準(平成21年文部科学省告示第64号)に示されている高度な衛生管理に則した運用を目指している。昭和51年1月に開設された施設であるため、老朽化が進んでおり、修繕・修復を重ねて管理している。なお、令和5年8月に「和木町給食センター整備基本構想」を策定し、高度な衛生管理を行える新施設建設の検討に入っている。

給食センターは学校給食を預かる一員として、①安全でおいしい栄養バランスが取れた魅力のある給食②地場産食材(山口県産)を取り入れた「生きた教材」となる給食③衛生管理の徹底④施設・設備の充実⑤食に関する指導 を方針に掲げ運営している。

(2) 学校給食の目標

- ① 適切な栄養の摂取による健康の保持増進を図ること。
- ② 日常生活における食事について正しい理解を深め、健全な食生活を営むことができる判断力を培い、及び望ましい食習慣を養うこと。
- ③ 学校生活を豊かにし、明るい社交性及び協同の精神を養うこと。
- ④ 食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについての理解を深め、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- ⑤ 食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解を深め、勤労を重んずる態度を養うこと。
- ⑥ 我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること。
- ⑦ 食料の生産、流通及び消費について、正しい理解に導くこと。

2 本年度の努力点

- (1) 良質で安全なおいしい栄養バランスがとれた給食を提供する。
- (2) 望ましい食習慣を身につけるために必要な知識や習慣を指導する。
- (3) 課題や季節に応じた食に関する情報発信を行う。

3 本年度の歩み

会議・研究

① 給食主任会(毎月1回)

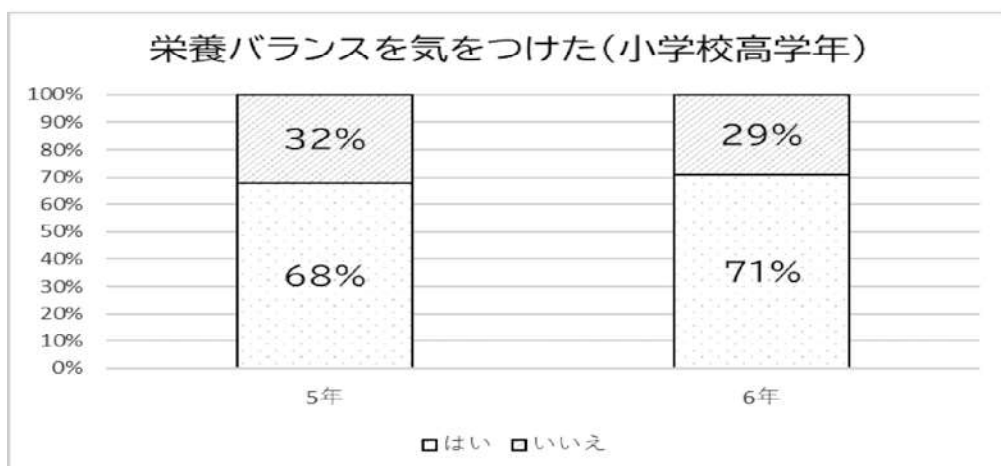
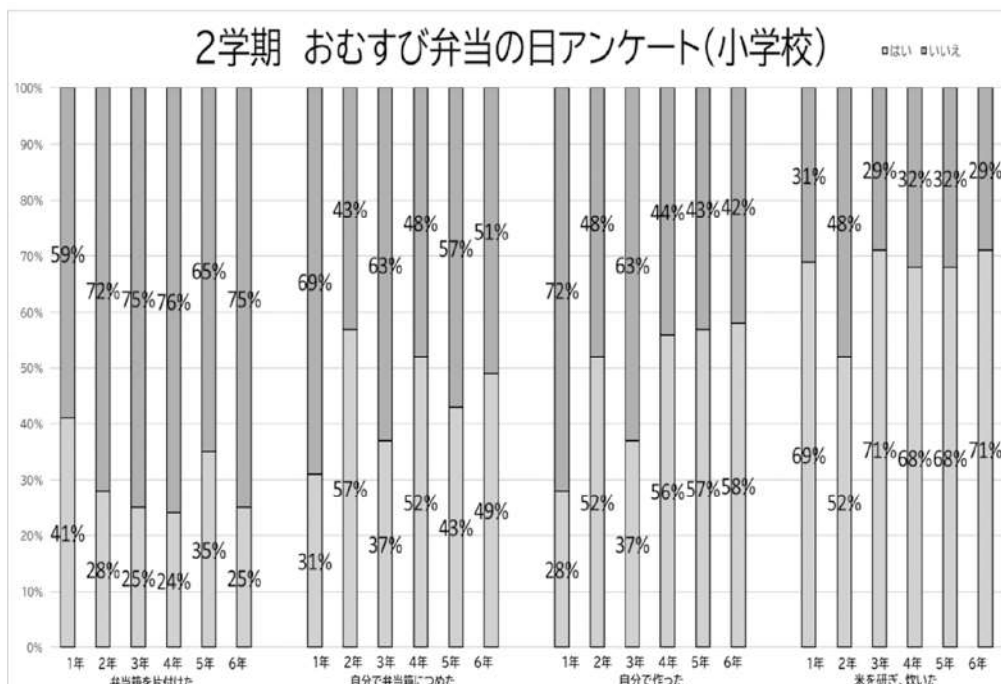
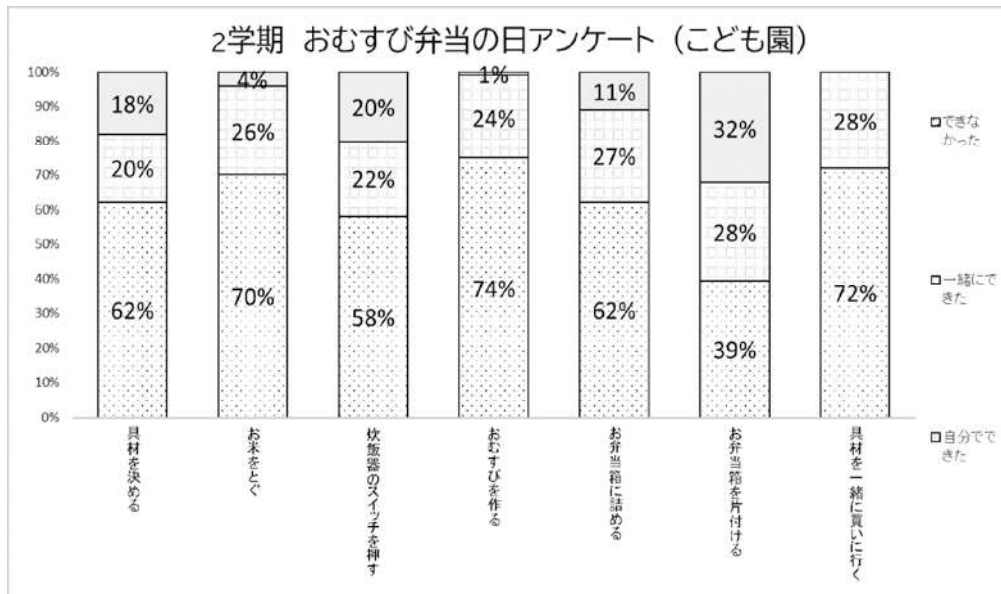
こども園・小学校・中学校の給食主任、所長、調理主任、栄養教諭の計6名

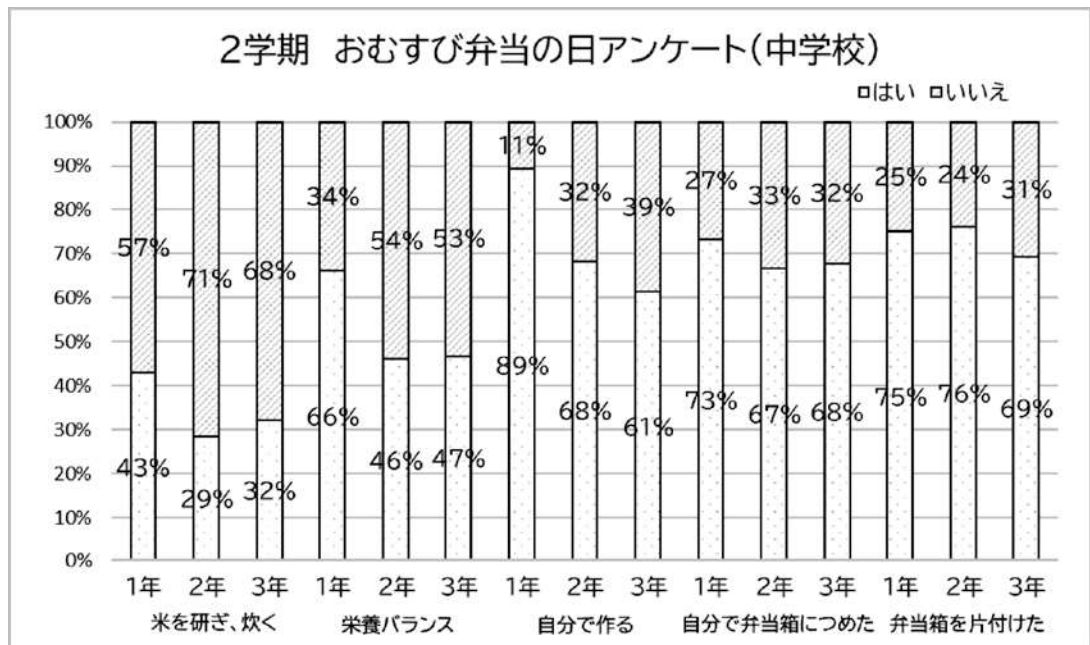
前月、及び当月の献立についての反省、翌月の献立についての検討

4 本年度の成果と課題、次年度への抱負

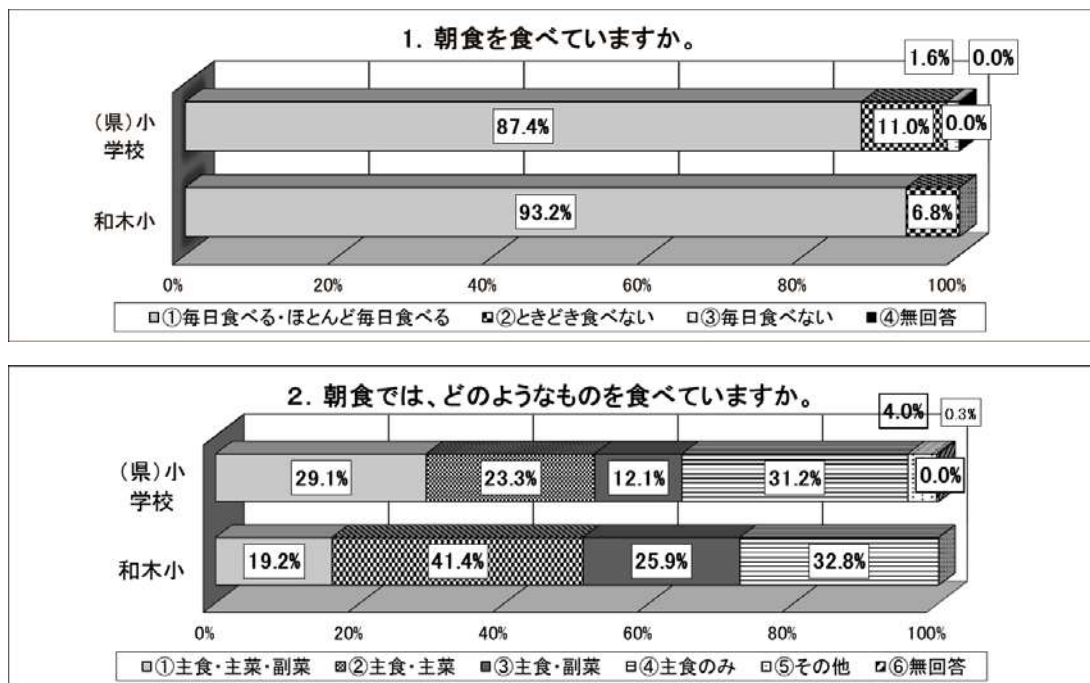
(1) 成果と課題

- ① 令和4年度と同様、「安心・安全でおいしい給食を提供する」ことを目標とし、県の示す山口県食材の使用目標値は65%以上であったが、今年度は60%と目標値より低い値となった。県産食材は、食材の生産量および収穫量・価格の問題もあり、なかなか確保しづらいが、今後も県産食材を使用した加工品等も活用し、目標値を達成できるように取り組みたい。
- ② 令和5年4月1日、乳価や賄材料費等の高騰を受け、平成21年1月から据え置いていた給食単価を改定した。給食単価をこども園205円から220円、小学校270円から285円、中学校290円から305円に増額した。
- ③ 適宜、衛生管理についての見直しを行い、今の衛生基準に合ったより衛生的な作業が行えるよう改善に努め、コロナ禍で開催できなかった調理員研修を再開した。
- ④ 給食時間の放送原稿では、食に関する知識や情報、地場産物や食材についての情報を提供することにより、食に対して関心や知識を深められるようにした。
- ⑤ 各家庭に配付する献立表を表面に献立表、裏面は食育だよりとし、毎月作成した。月別に献立目標を献立表に記載し、それにもとづいた献立の作成を行った。また、給食や行事、おむすび弁当について記載することで、家庭でも食に関心をもてるよう工夫し、食についての情報発信を行った。
- ⑥ パンと牛乳のみアレルギー対応を行っている。そのため、その他のものについて、こども園、小学校、中学校でのアレルギー対応がしやすいよう、料理ごとのアレルギー一覧・食品ごとのアレルギー一覧の2種類を作成している。また、ノンアレルギーの食材を活用することによりアレルギーのある園児、児童、生徒も食べられるよう工夫した。
- ⑦ 防災教育の一環及び緊急時に給食提供が困難となった場合に備え、防災用レトルトカレーを購入し、園児・児童・生徒・教員に各1食分をこども園・小学校・中学校に常備した。次年度以降は年1回をめぐりに実食の機会を設けていきたい。
- ⑧ おむすび弁当の取り組み状況について、こども園、小学校、中学校でタブレット端末を使用したアンケートを実施した。また、アンケート内容についても成長過程に合わせて変更した。小学生では、4年生以上では、55%以上の児童が自分でおむすびを作っている。積極的に取り組んでおり、親子で食にかかわることができる良い機会となっていることがうかがえた。(下記参照)





- ⑨ 今年度実施した和木小学校5年生の食生活アンケート結果では、朝食摂取率は93.2%と県平均より5.8%高い結果であった。しかし、「朝ご飯にどのようなものを食べていますか。」という問いでは、(主食・主菜・副菜)がそろった朝ご飯を食べている人は19.2%と低い。朝食の内容について課題がある。(下記参照)



- ⑩ 令和5年8月、老朽化している学校給食センターの建替を検討していくため、『和木町給食センター基本構想』を策定・公表した。センター整備の基本方針として、次の5点を掲げている。

- ・安心・安全で栄養バランスの取れたおいしい給食を提供する施設
- ・適正な施設規模とライフサイクルコストを低減した施設
- ・効率的で作業環境に配慮した働きやすい施設
- ・食育推進、災害対応、環境影響を考慮した施設
- ・新しい給食センターに最も適した事業方式の採用

(2) 次年度への抱負～努力点

- ① 県産食材は食材の生産量及び収穫量・価格の問題などあり、なかなか確保しづらいが、今後も県産食材を使用した加工品等も活用して、目標値の70%は達成できるよう取り組みたい。
- ② 衛生管理については、まだ不十分なところがあり、また施設等の老朽化による課題もあるが、衛生管理マニュアル等を活用しながら、できるだけ改善していきたい。
- ③ アレルギー対応については、現状では個別対応することは難しいため、ノンアレルギーのものをもっと積極的に使用して、食物アレルギーがある子ども達も食べられるような給食づくりに取り組んでいきたい。また、保護者に対しては、給食の詳細なアレルギー情報を伝え、対応していきたい。
- ④ おむすび弁当の活動が広まるよう、委員会や体力向上部会等での活動を積極的に活用していきたい。また、結果について教職員や家庭にさらに情報発信を行っていきたい。
- ⑤ 『和木町学校給食センター整備基本計画』を策定するとともに、基本構想で定めた条件を満たす建設候補地の選定を進めていきたい。